

主幹・麻生路郎

川柳新誌

十一月號

大正十三年三月三日第三號
昭和三年十一月一日發行
每月一回（日行）

川柳雜誌

第五卷 第十一號

川柳雜誌社發行



「週刊朝日」

賞懸 文藝大募集

柳川「新妻」

選者麻生路郎氏一人一句用紙官製ハガキ使用の事ハガキの裏面には必ず住所氏名本名ハ明記されしハ大阪中央郵便局私書函五〇番大阪朝日新聞社内週刊朝日懸賞文藝係宛ハ入賞第一席(參拾圓)第二席(同貳拾圓)第三席(同拾圓)佳作二百名記念品ハ締切十一月五日限りハ發表週刊朝日新年特別號誌上

御大典奉祝聯合會

- 日時十一月五日午後六時
- 場所 南區日本橋一丁目交叉點一丁北ノ辻東入 日本橋俱樂部
- 兼題 「神馬」三句
- 兼題 「嘘」三句
- 會費 三拾錢
- 記念品贈呈(出席者全部に)
- 佳作呈賞

曠古の大典を壽はぐ意味に於て本社京阪神各支部主催のもとに右の通り奉祝句會を催しますので本社の例會は休む事に致します。

川柳雜誌 第五卷第十一號 目次

感想・論

凡境凡想
朝日俳壇を讀みて
わが川柳を思ふ
雅拙の句に會ふ
光擡抄評
川柳鬼門三則
秋を前提して

研究・其他

川柳年中行事に就て
唐柳短解
月評
西原柳雨
蛭子省二
紋太山雨樓
素人ひろし

一路集(募集句)

石炭 森東魚選
天井 矢田冷刀選
入齒 中川眼隱子
柳翁忌 西本三笑共選
本社十月例會 安井ひろし記
川柳家戶籍調 橋本二柳子記
各地柳壇 安井ひろし
曲馬團(表紙) 吉田清

編輯後記

創作

近作 小 楢重
路郎、革郎、二柳子
麻生路郎
酒井駒人
松盛琴人
川合舟々郎
三好革郎
安井ひろし
岩崎柳路
橋本二柳子
中見光路
中澤濁水
松並光哉
松丘町稔
谷村柳陽
青山孤舟
中島鐵洲
檜山千代二
粒々集
富士野鞍馬
柴谷柴舟
近作柳樽
諸長崎柳家
前田五健
田五健
柳秀



近作

麻生路郎

坐食してゐるさも言へずつけさせる

○
風あがりきつて親子が口をきき

○
ふみ眼をやれば煙突にけむりなし

○
臍のありかの寂しくも秋



近作柳樽

路郎

1

孝行さしらず先生叱るなり
カフエーのマツチ朝寢の枕元
看護婦のせめて時計に赤い紐
ステツキの輕き心が續けたし
大學を出て月給が有難し
出迎へもなく安着のバスケット
少しづゝいびつになつてゆく心
たまの休みを夫婦いさかひ
死顔のせめてよかれミ願ふのみ
押しのけて乗る朝々を悔ひながら
肩揚げもごらずはかなき戀をして
つきつめて戻れば嫁にやるはなし
近よればもう氣色ばむはらみ鹿
先生ほご黒うなりたい泳ぎの子
鑊盤へ來るミ目に立つ爪の垢
催促に來たミは見せず子をあやし
或る時は父の血統を疑はず
同年ミ言ふに隣りは課長なり
先代を大事がるのも本家だけ

同尼同同同同同同同同同同同同同同同同同大

崎

版

同虛同同同同毒同同同同同多同同同同同聞

選

喜女

路

仙

白



見わないとおもてた仲居子を抱いて
汲み上げた井戸へ飛び込む蛙の子
二階 借こまる人をば取次がれ
十餘年振りに舊友に訪ねられて

君の方が若いミウツを語り合ひ
校友簿へ實業ミ書く皿洗ひ

途上スケツチ (三句)

逸れ玉を投げてやる手の不器用さ
支那町の夜薄氷を踏むで見
世帯染み安い玉子に立ち止り
貧しさに足は眞白し夏ミなり
家のほか女のなさけなきはなし
友の家ありたばこ屋はあり
物干にたてば浮世がみへるかな
女等にきたのか美しき夏が

路郎先生等々猪名川畔にて (三句)

打解けて話せば水の音もよし
石投けて子供にかへる面白さ
川水へみんなの影が重りて
傳書鳩大任の身ミ知らず飛び
うかつにも二百廿日を子に云はれ
ほめられて手持無沙汰はかしこまり
もつれ糸ミく氣で今は世を渡り
立志傳もう間にあはぬ年ミなり

同	同	別	同	同	同	同	池	同	同	同	神	同	同	同	桑	同	同	同
同	同	府					田				戸				港			
同	同	晃	同	同	同	同	白	同	同	同	鎌	同	同	同	敏	同	同	同

卓

蝶

月

郎



丙午嫁ぎもせず、に秋に逢ひ
 明月はやゝ太いなさ見た斗り
 三尺を離れて對し人の妻
 就職に靴のかたさがわかるなり
 膝枕死んだ女房をふさおもひ
 失戀の喉につまつたウイスキー
 しみぐさ意見する氣の障子あけ
 この俺に神籤の吉がうたがはれ
 事茲に至り女の父を知り
 椅子一つはなれ月給違ふ也
 良縁と言ふ兩方の貧乏さ
 社のためにまで嫌はれる癖を出し
 子の群れが散り泣かされた子が残り
 共稼ぎ朝の膳にも灯が點り
 生涯をついてゆく氣で許したが
 衆人にみつめられてる強情さ
 平等を望む階級にて暮し
 物質に女心が秤られて
 拾圓の金がおろかに消えて行く
 七拾の念佛場所をはからず
 十八の結局春の水に似て
 勞働者今日云ふ日にけつまづき
 心からお禮言はれて淋しがり
 秀才が浴衣着て來る秋の風

同 豊 同 同 同 大 同 同 同 長 同 同 同 長 同 同 同 大 同 同 同 島 同 同

中 阪 春 野 阪 根

四

同 閑 同 同 同 露 同 同 同 菱 同 同 同 高 同 同 同 桂 同 同 同 花 同 同

生 斗 明 峰 風 情



密談の額をバスはかち合せ
 他人らしく妻こゝる日の火鉢なり
 父死んでそれきり本家他人めき
 ぎうやらかうやら説き伏せた戀女房
 風すきをほめて二階の女客
 里の母お産の事も假名で書き
 聲養子始末すぎるでチト困り
 買ふてきは云はずにあればもう着れぬ
 親類はみんな親父も同意見
 今日草を採つた青田を風呂で見る
 算盤に母はだまつて見るばかり
 轉宅の机の足は天を向き
 通譯の手眞似うなづき乍ら見る
 噂する處へ來るこ喜ばれ
 死に目には會へぬ覺悟のこに住み
 子があつて遂に善人こはなりぬ
 お辭儀してお辭儀をされて生きてゆき
 云ひ負けて歸れば家のちらけ様
 幸福な履歷書きなれ筆を擱き
 氣がつかぬ筈なし金がないの也
 ちかごろはむかひの山をなつかしむ
 その體なればお金も儲からう
 一徹言はれし君の尊さよ
 言ひ譯の果てに利のない口をき

同 同 同 神 同 同 大 同 同 姫 同 同 同 大 同 同 同 鳥 同 同 同 大 同 同

五

戸 阪 島 阪 取 阪

志 同 同 竹 同 同 蒼 同 同 觀 同 同 同 忠 同 同 同 聽 同 同 同 伴 同 同

梧

郎 木 樓 月 八 松 内



心附じやるゝ下駄なごふいてゐる男かゝ言はれて下を向いたきり死金を費つて其夜風邪を引き因縁の話に飯がまづくなり愛の巢は新聲劇も見に行かう快樂のつもりで部下を叱りつけ不景氣の話で此處も夕涼み日記帳半分残して逝きし子よ空瓶を残してみんな舟を捨てバラッルは木蔭で下女の手に渡り蜘蛛の巢をはたく手ごろな竹箒早く乗れ早く下りよゝバスは言ひ次につく驛を教へる通勤者墓詣り心ゝ別に飾つてゐる南國に籍を持つてゐる燕の子生玉子一つお粥の膳へつき魚釣に踏みにじられた春の草失職もせず不景氣やりすごし無駄使ひしてはいかぬゝ送り出し猫にかゝれた傷へ春風惱み惱んだ日記の灰よ右せよの左せよのゝ局外者御神籤の厄日は過ぎて死んでゐる孝行をせよゝ兄貴は死んでゆき

聲同鳥同同同大同不同國同堺同同同山同同同大同同同

池 取 阪 明 館 口 阪

湖同穗同愚同ヲ同失同里同露同清同竹同か同吞同冷同

波　　ン　　　　　　　　　馬　い
舟　子　陀　公　名　魚　路　涼　人　痴　陽　笑



朝顔も淋しく咲いてぬれて居る
 淋しさは面會人もへつてきて
 眞夜中のさうざうしさは死んでゐる
 吸殻のすいぶん待つたらしい數
 只今に肉の匂ひがぶんこ来る
 アナウンサー風呂へも行ける時間もち
 問題の渦中へ洋行歸つて來
 ら高を拂はぬ方がおほて居
 丹精のメロンを無造作に食はれ
 頭から父商人にすぎる積り
 共産に肩を持ちたい日も續き
 心配の背へラデオの派手にくる
 釣瓶井戸四五杯までは樂に汲み
 折鶴が舞ふ御座敷へ通される
 部屋の明るさへまんほが迷ひ込み
 今は仇になつてしまつた保證人
 射的場には支那人臭くねらつてゐ
 樂しさは親子揃ふて茶漬なり
 揃へさす靴も社長云ふ感じ
 これしきの事を相談せよ言ふ
 あの聲で賣る煮豆屋の味なさう
 丸髷に結はせてみたいのこ出逢ひ
 ありがたいけれご重たい薩摩芋
 うわさ立つ身になり若さ過したし

同 同 大 同 尼 同 大 同 長 同 同 同 大 同 堺 同 神 同 丸 同 神 同 同 同

阪 崎 阪 春 阪 戸 龜 戸

八

離 同 源 同 風 同 柳 同 東 同 與 同 陽 同 三 同 卯 同 柚 同 華 同 邦 同
 楓 坊 鈴 笑 子 夫 亭 絃 生 坊 水 郎



おしつよき男と女息をのみ
 諒解はあつた筈だにこの左遷
 破産した長者が残す井戸と堀
 錢湯へ女房らしいが傘をもち
 妾宅へ自由を説きに來る女
 全身の聲量山で吐いて見る
 家政婦の淋しい主義で生きんぞ
 ガタ馬車のしなだれかゝる様に揺れ
 外交員近所にすまぬ身拵へ
 蟠りなふて旅装の軽い事
 云ひ聞かす事あり娘肩を揉め
 腹にないこゝまで云つて鞭をあて
 親方の留守見積へ弟子が寄り
 個性なき何うでも一兵卒として
 お隣りミ身分が違ふ妻の帶
 十五夜を飾つてそばについて居る
 女房の愚痴晩酌がみんなさめ
 圍ひ者は知らず弟遊びに來
 天井をぬいてひる火事こゝがすみ
 縦ひ船淋しう襦袢干してあり
 厄除けだなど愚かな智恵をかり
 外は雨母唐黍をやいて呉れ
 丸髻のズラリと掛けた涼み臺
 引越のこんき不便なきこへ行き

神 石 同 同 同 大 螢 同 山 同 石 同 鞍 同 同 同 鳥 同 神 同 甲 同 同 同
 戸 川 阪 池 梨 川 山 取 戸 府

松 錦 雲 柳 吐 名 唯 同 一 同 盜 同 草 同 耕 同 青 同 千 同 峽 同 柱 同
 句

月 水 峰 人 坊 月 一 笑 鐘 明 民 水 鳥 美 枝



ロシヤからバンを賣るのに日本へ來
 脱衣場きつち向いても風があり
 瘦腕に口が手傳ふ四十過ぎ
 今日も留守か大きな犬があるばかり
 お待遠様さいひひく吸ひ付ける
 一人身問はれそれから戀ひはじめ
 海水が母國へつゝくなつかしさ
 たゞ何も言はず女給のコップ酒
 烈風が押せばもたれて歩いてる
 月給で生きるこゝよりわきまへず
 膝へ來てニキビをこつてやろ言ふ
 獨學の兄に問はれて氣がつまり
 妹がごうやら喰はすいくぢなし
 貧乏な人こ片付け度くは無く
 すゝめられやつこ女の傘に入る
 ウエータは秋の氣分を色で見せ
 東京の廣さを見せる雨の音
 はるくきたよつて江戸言ふ所
 あきらめて居るのに連れが承知せず
 テントからテントへ續く聲があり
 ひる寢からさめて兵兒帶結びかへ
 虚榮みや次第に村のさひれゆく
 うつかりこ掛けて墓石へ氣がすまず
 此頃はおれの藥に愛想つき
 姑が逝けば程なく斷髪し
 夜遊びの叱言外には連れが待ち
 思ひ出し立つてはみたが又忘れ

大 近 大 兵 大 生 大 同 兵 朝 大 神 東 筑 金 石 東 神 鳥 大 大 德 大 同 同 神
 江 阪 庫 阪 駒 阪 庫 鮮 戸 京 澤 前 川 京 戸 取 阪 阪 島 阪 同 戸

正 柳 香 素 翠 丸 呵 珍 東 鐵 雨 鄉 素 賣 郊 湖 幸 休 白 雲 一 樂 瓢
 け 々 狂 か 波 茶 泉 山 村 亭 浪 川 子 月 庵 ち 子 郎 子 葉 浪 萌 行 狂 し 吉
 六 鳥 舟 柳 子 歩 ち 泉 山 村 亭 浪 川 子 月 庵 ち 子 郎 子 葉 浪 萌 行 狂 し 吉



光耀抄評

—新らしい柳多留をつくれ—

竹馬居主人

『俳句ミ添削』誌をみるに、女流作家が非常に活躍し、多数でもある。創作に研究に將た短篇小説に、男子を後に瞠若たらしめてゐるのは偉彩さいふべく、之を柳界に省みるに本誌に女流川柳家の、倦むなき努力が著しく顯はれて居る、他にない一箇の驚異も言へる。私は之等の作家を時に好遇するの提案をした處、本誌社友會の議の上つて快よく承認をうけた結果が、八月特輯號の光耀抄になつた、だから一層の親しみを持つて味誦した。茲に一言を費すは自らなる交渉である。

昔に女流作家の乏しいのは、時代が女子を束縛してゐたからで、洵に止むを得ない。今後は當然女子の占有する天地に、川柳躍進が行はれ既成觀念を打破した。眞の美と愛のすなほな藝術に、被浴する幸福が惠まれよう。此頃流行の女子参政權運動なきは、未だ單に女がある種の男にひきづられて居るに過ぎな

い。乃至男に訓わられた束縛に對する反抗昂奮の刺戟的要求の一部現象で、それは女らしさの内部示現ではない。盲目的な破壞的な寧ろ空虚な不安なる暗示に、女性價値の動搖を暴露するものこそ言ひない事はない程、愚かしき行爲も見せつけられる茲に於て参政權問題よりも、川柳誌上に女子の感激が覺醒されたならば、内生活の詩化は、恰も信仰の全安心の如く、社會的に家庭的に信念を強め得る抱擁となる。

女子の日常茶飯事を藝術的に取扱ふ事は、實に人生の理想境である。そこには男子の無謀な缺陷を、正しい生活に還元する愛情と謙遜が宿る。換言すれば川柳詩美の默契が、男女間に醗釀成育して、廣く深く人生創造の満足大勢を誘致しよう。

帆立貝人手具なご子に教へ 蕞乃

昂奮ミか刺戟ミか色彩ミかを、無理じひしてはゐない。いひの

子女をもつ家庭にも見出す、母親としてのなすべき事を爲しつつある報告、それが正直な藝術としての光輝を有する。切實な融合的愛情を徹底透徹させる。かの元祿五俳女の一人なる千代女が『蜻蛉釣今日は何處まで行つたやら』我子を失ひける時の作であるが、それは正直な詩である。單純化の以つて無限な認識に到達したい。

道端にすはつて母をねだるなり (古句) 五英女

普遍性を存して居るから、美しい言葉の技巧にいかさなくともこの時代を通じて生命がある。これを外國「世界」へもたらしめても通する。即ち詩の弱極味いへよう。帆立貝の作も亦世界的に理解が出来る。

よくなつた人に看護婦使ひに出 壽枝女

九月號に共選で『看護婦』の課題吟が發表されて居るけれども、此句に列ぶものは見出し得ない。複雑な情緒、それを荒削の片影で現はして居る大膽さに、女性特有の眼がある。曖昧な言葉でなく、若い看護婦の性格、職業信念、感情を弾力性あるものに、こなし手法は仲々老巧だ。同じ作者に

食用になるとも知らず鳩は肥へ

がある。一種の小穿鑿で計算化である。抹殺したい。

三羽でも一羽でも鶯あはれなり その女

なごは、古川柳のガンだ。

蔓草のやうに育つて二十一 多喜女

古川柳の概念では、十九二十で肺病の厄に罹る作許りである。

二十一は一單に聲調上の嵌込みではない。二十三でも下五は据はるが、蔓草のやうにを活かすには二十一であり度い、『やうに』吟は古句にも夥しく、私は排斥者の一人で『鯨録』二年五月號拙稿参照があるが、此句は多少救はれてゐる。感情が解剖的でない、内面中心に必然性をみせて呉れてる點が好い。然し眞實を求めるにはヨリ直流的であり度い。

十九たちまち花嫁の月の帯 (古句) 琴糸女

これも亦ガンだ。

門に隠れてゐた子供が『尋常三年』突然飛出して、おぢさんカルピスの初恋の味ッてごんな味なの、ビツクリした私は此の質間に二度ビツクリした。

カルピスに若さをそる事もなし 葎乃

私の青春時代にカルピスがあつたかどうか、そして初恋の味も知らぬ程オールドボーイになつて妻を得た。此句に直面して私のヒゲにメツキリ白さを加わしたのに氣付く。句は慣習性を帯びてゐる、環境の省略もが明瞭でない。寧ろ

水屋で母だけ一人宇治をさり 吟女

が反動的に娘はカルピスを麥ワラから吸つてゐる情景を描き得はしないか、多分は初恋の味に恍惚として居るであらう。知らぬは宇治をつゝいて居る母親許りなりけり、時代の推移は迅速である。只『だけ』ですむのに『一人』をも附加したのは、エンプアサイズではなくて、手取早く辻けをうつた型なのが惜しい。同じ作者に

嬉しさの鏡にこぼれ髪をすく

程の技巧化があるではないか。此句は月評の組上になつてゐるが、私はその表現を好まない、事件的に働かむとしたものでなく、技巧の手法により僅かな材料を調理したのみで満腹しない下の句をつけて三十一文字としたならば、情趣の具象が簡明しよう。舌觸りは好いが溶けきらないまごろしさがある。

電車から葬式二つみて歸り 武 子

この表面描寫だけでよい。二つは確かに二つなので「鳴子引き子の愛相に一つひき」の一つは違ふ。又「葬禮をみて初経値が出来ゐる」の理智の問題も含ませたくない。走る電車の窓から葬式自動車であつたらうを二つ見た云ふ單なる焦點で、都會詩としての如實を充分躍動させて居る。若しつきつめて論ずる見方があるならば、句に破綻を生ずる程散漫で技巧が足らぬ。私は昔の作家が殆んど狂句に墮して居るのを觀て、斯るゆき方の作品を提出された事に興趣を覺ゆる。古川柳の若十を示してみよう。

野掛道頭へ属くゝしつけ 五英女

夜る夜中仕立おろしをほふり出し 同

やれ遠いぞここの紅雲を出し 同

四海浪しづかにまわる四文錢 登蝶女

直しても煙管にのこる廓のくせ よし子女

楊弓の定木につかふ鼻柱 同

佛心に至る迄嫁ふみこたへ 此女

一鉢は現世の爲めに細末し 同

南無三寶女房こくうへ舞上り 鳥友女

来る年の笑ひ初めは煤はらひ
紙難を隣の米屋つき倒し
ぶら／＼苦しむで居る放し龜
げち／＼をすてる團扇のいがしき
玉づきに女郎の胸はうらおもて
二三年経込むで置く母の慾
追つかけ焼場義理のあたまた敷
うわのそら足のぶらつく奴風
追ひついて下女子を愛す駕の窓
打出しに取巻で出るうつくしき
香奠の穴をうめるさ形見わけ
身がよつて骨を集める島部山
口寄せにさしにも猛き遣手なき
同 蛙井女
同 虎女
同 文魚女
同 雪女
同 琴糸女
同 鐵扇女
同 香奠女
同 身がよつて
同 口寄せにさしにも
同 作品中比較的佳いもののみを抜いたのであるから、他は川柳墮落期であるだけに全然狂句許りで、僅かに芽を吹いてゐた女流に對し、多くの同情をも拂ひ得ないのは残念である。私は光耀抄を繰返し誦吟して、川柳女性の立脚地が眞の藝術に、いかに覺醒され、いかに玉成されむとしまつゝあるかに歡喜を覺ゆる。尊い進歩であると同時に、その作品が新しい柳樹として將來の女流の間に傳へらるべきを想倒せば、一句一吟も忽にせざらむ事を切願する。

たうきびを岐阜提灯の下で食へ 欣 女

『岐阜提灯』は彩ざりではない、家族生活環境の落ちついた堆積が、詩材として選擇される時に、衝動の渴仰から何んのこだはりもなく、眼に映じたもの、事實岐阜提灯がブラ下つてゐたそのフレッシュの直寫が嬉しい。

朝日俳壇

松瀬青々選

丹波 其 桐

はぜの葉の一二枚もみち秋立てり
夕立に皆たわひなる今年竹

丹波 青 兆

干瓢の干されしまゝに涼みかな
二三本芒がさして清水かな
草深きさころで蟲ひそみなり

大阪 樂 鳥

夏川や船腹鳴らし漕ぎ渡る

丹波 露 花

稲の葉のみざりの見ゆる夏の月

奈良 獨 舟

大湯屋の壁に影して夏木かな

堺 宵 月

夕立のうまやに蓬くすべり

伏見 さう 玉

人いきれをばなれて橋の夜露哉

河内 松 柳 龐

夜空つく餘の名知らず聴いてゐる

湯歸りに拾ひし一つ螢かな

丹波 采 女

ぐみの木の葉は蝕みて残暑哉

神戸 孝 み

萩の枝延びたるを見て山行く

徳島 ふ

青すだれほし椎茸のふなり哉

朝日俳壇を讀みて

わが川柳を語る

梶 元 紋 太

私は「朝日俳壇」が俳句界の什麼地位にあるかを知らない。又、松瀬青々氏の主義が俳壇に於ける如何なる部に屬せられるかも亦知つてゐない。實は「倦鳥」もまだ一度も讀んでゐないと言つてもよい位だ、私は俳句には門外漢であつてその上市井のたゞの人間である。だから私が何事も知らないといふ無智さをゆるされたい。

私は新聞を披いて讀んでゐる『大阪朝日』である。そこに「朝日俳壇」が掲出されてゐた。私のやうな者の眼につき易いのは仍り新聞の俳壇である。特に手近にある『朝日俳壇』は最も見る機会が多い。そして私は常に愛讀してゐる一人である。昭和三年十月十日の日附。句を通讀するに例に依つて私に迫つて來る或美感がある。

以前に誰か『倦鳥』の句は萬葉俳句だ。三簡單に言ひ放つた言葉を小耳に挾んだこゝがあつて未だに覺てゐるが、當時私はその言葉から却て好感を持つこゝが出来たのであつた。今その言葉の眞の意味を知らず『倦鳥』の傾向も知らないほんの通り懸かりの私が『朝日俳壇』を見ての感じは、その儘私の心持に受入れられるこゝの出来る句境であると思つた。

句を通じての作者の生活が偲はれて慕はしく思はれる。人々は實化そのものを對象として自在に謳つてゐられる『はぜの木』の下に立つ作者の姿が見える。自然現象の一つくを味はひ事々物々に注意を放つて『でゝ虫』にも『夏木』にも自然に詩情の流露を見るやうな作句生活に浸つてゐる人々の姿が見える。俳句としての巧拙は知らない。何にも知らない。たゞ句の裡に潜む純情を私は感ずるのである。

私は私の親しむ川柳に、私の作りつゝある川柳に、最も缺如してゐる處のものを朝日俳壇に見た。私は又「短歌」にも見た。いやそれは詩として最も重要な地歩を占むべき苦のものだ。それが我が川柳に非常に稀薄であり、他の詩壇からは認められてゐない。川柳には川柳としての傳統がある。私はそれを毀さうとするものではない。寧ろより良き發展を希望してゐる。けれ共その中に、けし粒ほきの可能性でもあるならば、それを伸展させ擴大させて、より良き川柳の一分野に作ることを一層翹望して止まないものである。

川柳は我々の生活に最も近接な詩である。滑稽されてゐる。それにも關はず我々は句會に立籠り課題に支配されてゐる。句會を通じて自然なり社會現象なりを見やうとしてゐる。課題を通じて詩情を咬らうとしてゐる。何故もつゝ我々は勇敢に街頭に立たないか。現實そのものに直面することをしないか。

課題を通じて我々の經驗を想起させ詩情を再燃させる。消極的ながらこの方法もある。又事實、實感を句に纏めるまでの經驗はそれと異ならないものもある。然し題詠を主とする時、經驗を綴り合して第二の經驗を假想して巧に作り出だすの弊が必ず伴ふて来る今の川柳にはそれが多數を占めてゐるかも知れないそれを許す人もあらう。私はそれが成功してゐる場合でも、何だか浮足だつた幽霊のやうな句だに感じられて仕方がない。川柳が遊戲的であるに批難される原因、又批難を受ける句の多く生まれる原因は斯うしたところに胚胎するものだと思ふ。

これ程のことは皆知つてゐるのだ。某々氏等に私は直接聞いたことがある。又句を通じて人々の意圖も付添するこゝも出来る。現柳壇の可成多くの人少解つてゐる餘である。知つて居てたゞ實行が出来ないだけである。少數の人は例外で我々の多くは實行が出来ない。それには從來の客觀的な句体なり、それを生むべき思想なり趣味なりがそれに副ひ難い點が多いばかりでなく題詠の易きに馴れて仕舞つたさいふ事も確かに災ひされてゐる原因だと思ふ。それか突破するには種々の實へなければならぬのである。

「朝日俳壇」の句が實に世界の前に立脚して觀照の眼を放つて推賞して已まない。然し私としても後句者の全部がさうした立場に自覺してゐられるものとするものではない。たゞ選者たる青々氏の傍に於て選辭を惜しまぬものである。

同じく自然の推移を感じ、同じく萬物の成長に目を睥睨つてもそこに丹波人、大坂の人、奈良、堺、伏見、河内をそれ々の土地の香りが句に滲み出てゐるかの様に感じられてならないのは獨り私のみの感じであらうか、そこに切實に感じられるものが匂ふてゐる。さうしなければならぬものを持つてゐる。

處が川柳は餘りに混雜してゐる。皆が皆ではないが、その混雜に紛れてしまつて色も香もない感じがする。秩序ある大まかな雜踏なれば面白いが只の混雜は又つともよくない都會も鄙も北も南も分ちがなく四疊半の題を語り、芝居の果てを考へる事は感心しない餘りに浮はつた態度である。一度、川柳は此塵ものだに理解したならば皆、各々に自分の本領へ立戻つてそこから句會氣分でなく、眞物の題材を課して自分と實在世間と對ひ合つてしつかり句を作り出す。



凡境凡想

川村花菱

先日三太郎に會つた時に、川柳雜誌の麻生君が筆を持つ事を禁じられた話をきいて、大變氣の毒に思つたから今『言葉に就いて』の感想を書きつゝある云ふはなしをした。するこ、君が書くなら僕は書かない云つて、うまくのがれた云ふ顔をした。以來私は妙にかたくなつて、稿を續ける事が出来ない。何にも書かないのはわるいと思つて思ひ出すまゝを書いて見る

小咄と川柳

小咄にはいろいろ面白いものがある。その想ひはいづれも川柳的のものであるが、直ちにこれを川柳にしようとするなかく表現がむづかしい。人間の想ひはそれ／＼獨自の形を取つてこそ、はじめて藝術としての價值のあるものだと思ふ。川柳はあくまでも川柳でなくてはならない。然し又川柳を作らんが爲に川柳を作る必要は更にないと思ふ。

私共は、見たまゝを、感じたまゝを、自己の信する詩形に由

つて表現するより仕方がない。

山茶花よ、お前の紅は何故淡い

昨日、庭の山茶花が一ツうすもゝ色のしほりを見せた。秋雨のしき／＼降る中に、いかにもそれがあはれに見えた時に感想じた。吾れながら、凡想である。凡句であると思ひながら自分にはすてがたい。

書齋に倦んで門の所へ出て見る。そしてあてもなく立ちつくして居る中に、私は一ツの砂利を蹴つた。コロ／＼と轉がつてそれは溝に落ち込んだ。溝は相變らず小さな音をたてゝ流れる。二三日見覺への砂利今日も蹴り

これもくだらない。くだらない生活から生れ出るものゝくだらなさを思ふ。

名手凡手

先夜、三四年ぶりで、友達三作句の夕を催した。題は『海軍

『刷毛』『上げられにけりく』云ふのであつたが集まるもの六七、一つも句らしいもの無い中に、三太郎氏の丈けがいゝものがあつた。集まつた人々も元々相當の作家であつたが今は駄目だ。かく云ふ私も駄目だ。凡手でも相當苦心すれば、一定の所までは行くのだ、それがぬきん出るものが自ら一家を爲す事が出来るのだ。即ちそこに凡手と名手との差がある。自分の力丈けのものは三年もするに切つて仕舞ふのだ。更に新しい力を持つて、新しい境地に進んで行くものでなければ、何にもならない。いかに凡手にして、ある地位を保つ人々の多き事よ、從つて名手の妙き事を思ふ。

十四字の句

武玉川の流行(?)云ふのも變だが十四字詩の表現を此頃度々見る。十四字詩は十七字に咏めないものを十四字で表現し十四字ならでは感じが表れない所に意義がある。私の経験から云ふに、ある時は、十四字の詩ばかりしか出来ないやうな心境にある事がある。十七字でなければ出来ない時がある。

それは、自分の眼界が、ユーモアに多くの興味を持つ時、しつこりした見方をしたく思ふ時との相違で、前者にある時柳村の句に似たものが出来、後者の時に武玉川に近い句を得る事がある。それは私の生活にも由り、時候にも由る。

拾着て新地はさむい赤さんほ

たしか武玉川の八篇かに此の句がある。折から秋、私はこんな句が何故かしみぐさ味はゝれる。

十四字詩には、自らなる姿がある。リズムがある。只十四字を並べたわけではそれは全くの散文である。それが往々にしてあやまれたものがある。先夜

油障子で魚屋に知れ

云ふ川があつた。これは、怎しても『知れる魚屋』云はなければいけないと思つた。勿論句のいゝわるいは別である。何故『知れる魚屋』でなければいけないか云ふ事になる、それは高等數學程度に屬すべきもので、直ちにこれを説明する事は困難である。

靴音高く起訴を決定

云ふ句をいつか見た事がある。これも、句そのものゝいゝわるいは別として、もし強いて十四字にまで表現しやうとするならば

起訴をきまつた荒い靴音

ミでも云ふのだらうと思ふ。それでは調子が弱い云はれるかも知れないが、元來十四字詩は、表に現はれた調子の強弱よりも、内面の力の強弱に由るやうに考へられる。

今出た海女の荒い鼻吹

新らしすぎてすごい賣家

ともに、表面のしづかさはあるが、内面の動的な所は見るとのをしつとさせるものがある。句に、句の表から直ちに何事を感じられるもの、對者の胸に這入つて、はじめてそこに生き返つて胸の高鳴るものがある。きつちから見ても藝術の力は文字を以て傳へ得べきものでは無い(十月六日)

稚拙の句に會ふ

(食鬼聖放語)

川上三太郎



○ 今月は麻生氏の留守番の第二箇月目である。ミところが寒風が立つた故か悪友達も行き合はず、従つて一人でぼつねんとしてゐる。元來が行軍將棋の軍旗みたいな僕だから、背後に大將が居れば大將のやうな顔をする代りに、背後に誰も居ないミ全然機能がなくなる。厄介だけれども仕方がない。その下らないミところで今月は編輯者にも讀者にも勘辨して貰ふ。

○ その代り今月は川村花菱氏が力の入つたものを書く事になつてゐる、それは此の間川村氏のミころへ行つた時、僕が留守番の話をしたら、そりや氣の毒だ。それぢや今月は何か僕が書くから君は宜しく休養したまへ——ミも何ミも言はなかつたが、さういふやうな顔をしたから、それは有難う——ミお禮を言つたこれは本當である。論より證據本號を見たまへ。川村氏の力作が吃度ある。

○ 本誌の近作柳樽は實に妙だ。これは毎號川柳雜誌を讀む度

にさう思ふ。但し妙いふのは可笑しいいふのではない
ヘンテコなのだ。好い句がある。その代り飛んでもない句
がある。此の飛んでもないいふのは――下手いふので
はなく、寧ろ我々多少川柳にたづさはつて居る人々には到
庭思ひもつかない句があるのだ。生意氣な言ひかたを許し
て呉れ、それは雅拙の妙である。たゞへば十月號の中か
ら一寸拾つて見る。

夫は思へぬ程に酔ひ潰れ
此の頃はさきく叩く母になり
玉子焼四五人の子にいそがしう
赤ちやんやその恥かしいつ覺へ
靴脱げば今日の恥かしいかな熱が出る
手眞似して誘ひに來たは水泳が
雨足子

抜き始めたら限りがないし、それに折角の選句の批評をす
るやうになるやうな氣がするから此位にして置くが、誰だ
つて本誌の近作柳樽を讀んだ人は此の事に氣がつくだらう

○
僕は雅拙いふ事が好きだ。然し此の點になるミ麻生氏の
方が僕より一枚上だ。麻生氏の句には屢々放膽なミいふ
のは何も大きな事や大がかりな事を言ふ意味ではない所謂
雅拙の妙をよく體得してゐるのだらう。此の間北海道の函
館で麻生氏が作つた。

棄鉢は天井の知つた事でなし 路郎
なぞは最近の僕の所謂その妙を盡したものだらう。

○
此の點に於て淺井五葉氏の句は僕に學ばせるものが多い。
淺井氏は番傘で淡々たる筆致でよく寫生文をもつる。近
頃は何うしたのか一寸も書かないので僕は落膽してゐるの
だが……。淺井氏はもう十五六年も會はない、今度大阪
へ行つたら一度訪ねやうと思つて居る。番傘の十月號の
囃子方努力のほろが目に立たず 五葉
なぞはほんのその一例に過ぎないが、矢張りいゝ川柳を
す人である。

○
此の間青森のみちのく吟社で十周年記念大會をやつた時僕
も末席に参加したが、恩人いふ題の下に僕が句を拜見す
る事になつた時

○
恩人はやつこその日を暮して居 半風子
恩人の餘りわびしい住居なり 狂郎
の二句の何れを探らうかミ實に迷つて。約二十分此の二つ
の句を睨んだ。僕としては珍らしい事で、その結果遂に
やつこその日を暮して居の方を頂戴した。此の方に雅拙
の妙を餘計感得したからである。

○
氣取つた句、氣取つた川柳家。思ひ上つた句、思ひ上つた
川柳家。さうした者の多い現柳壇から雅拙の作及びその作
家に出會す位愉快な事はない。
麻生氏の病氣はその後何うだらう。早くよくなつて呉れ。



川柳塔

○ 龜井花童子

一人旅秋を知らずか山眞つ赤馬鹿同志歩いて腹が減るばかり終電に腹痛らしく顔を伏せもう月が隠れて銚子これつきり口笛に愚かさを知る歳に成り發車ベルまでは騒々しい別れ

○ 酒井駒人

義理の母涙ぐましい守を見せむつとした顔をお茶屋の灯がてらし兄さんの短氣を知つてすぐ歸り汽車賃をかりてから朝のめしがすみ越したこは知らず人力車を返し繼母の泣き顔孝子見逃がさず

公園で脚氣脚氣へふり返り夕焼の向うに危篤の祖母がゐる

○ 庄萬よし

衝突の記憶ないのが生き残り眠の前の金に他人の所有權築山へ連れてのんきに和尚笑み

○ 松盛琴人

失職へ光陰は矢の如く彼岸諦める底につかへるものがありみゝずばれまだおだやかにすんだ内母の一週忌一週忌の國でまた見るまんじゆさけ

○ 三好革郎

強く生き弱く死んだる女にて

久保菊子女史死す

○ 安井ひろし

糊かたき浴衣に女訪ねみん
郊外に住みたき妻の願ひにて
借金で其日暮らし君知るや
もうけたはさうの昔につかふて居
引き入れらるゝ神經衰弱の話
障子はりかへて月を親しむ

○ 川合舟々

じつと聞けば雨だれの切れかゝる
去るゝなれば酔へる人等もなつかしく
ゆるすべし蹂躪られてゆるすべし

○ 岩崎柳路

里歸り亭主が行くゝ倉を見せ
伊豆下田にて

○ 橋本二柳子

窓硝子寝ても起きても高い空
一足すぎで施しの錢を出し
踏切をしめられてから空を眺める

自宅にて

糸爪肥れぎ父瘦せてゐる

◇ 中見光路

お彼岸に弱い子もなし家をあげ
子の數を金に積つて氣を直し
何のその月雲をぬけ雲を抜け

◇ 水谷鮎美

まごまらぬ心姿のまゝ暮れる
いちぢくの味にまぎろむ秋深し
温かい陽射しの中に父と子と
さんざめき藝者電話へ惚れに立ち
焼香の煙にむせる子がひこり
紙幣の數かぞへてうんゝ酔ふもよし
叱られはせぬかゝ母を使ふなり

◇ 中澤濁水

女教員戀の敵の兒を教へ
繁昌の石碑屋墓地のやうに見ね
若夫婦國の便りは放つて置き
瀬戸物屋薬から柄を出しならべ
憤つゝして最早近所を考へず
人間は出來て居たのが犯す罪
合併校校友會が二派になり

◇ 島田翠峯

正直に云へば笑へり女ども
相談の中へ女は泣きに來る

落ちのびるやうに引越す一家族
戸を開ける音にも秋が訪れて
ラデオが止んでもこのおさらけ
軒店の駆け落ち者さ知れて来る
見送つて霧の深さを思ひるる

◇ 松並光哉

養生はせよと敬遠主義を取り
豪遊のそこから罪は記事になり
告白もよし秋風が吹いてゐる

◇ 水田黄彩

偶像を信じて病氣一つせず
立腹の程に縮らぬ安建具

◇ 松丘町二

貝殻の白きに秋の日を見つけ
化粧する妻を煽いでやつてゐる
美粧院自己から遠くなつて出る
木賃宿にも純情はあるものぞ

故郷にて

人よりも自然が待つてゐてくれる

◇ 猪野燕柳

罪人になり切つたのが肥れて居る
キヤベツなご作つた夫人病ひ勝
運命さあきらめますと刑につき

◇ 谷村稔

抱き締る何ものもなし夜の底
存在を同僚にだけ認められ

母病む(三)

乗せてた汽車鐵橋を渡り切り
母病んで近い他人を嬉しがり

◇ 石川双葉子

白粉をぬつて夕刊賣つてゐる

自分を観る句(六)

保険屋が来た其の夜から風を引き
忙がしい中へ保険屋が添書

保険屋へ話しの好きな親旦那
縁談の事で保険屋来たのなり

保険屋は勝手にまつて歸るなり
あきらめた家を保険屋二度通り

枚方樂園にて(二)

鴈次郎だけが似てゐる菊人形
プランコに乗つて藝者を忘れてる

◇ 中野柳陽

ルバシカの紐を離れて老ける秋
肌立つトグを秘めたる瑠璃の空

◇ 住田亂耽

女中ミ留守をまもるこぼろぎ
ソフト冠れば戀の顔なる

向ふでもあの顔ではと思つて居

◇ 青山 孤舟

戀人ミ會ふ中之島雨になり
こつてりミ塗つてガソリン賣つてゐる

◇ 朝田 新水

カラ脱すのにも子供がすがりくる

無茶苦茶な値にも負けてる支那吳服

此の町にしては大きい瓦斯タンク

◇ 中島 鐵洲

菓子折の一つで俺をさうする氣

挽舟の綱に芒のしごかれて

◇ 訖間 三猿堂

小驛のふけて淋しい女客

活潑に一年生は胸で行く

◇ 檜山 千代二

國を出て重役さんになつてゐる

エレベーターで田舎の母の手を握り

粒々集

○ 東京 富士野鞍馬

休んでる車掌は靴の品さだめ

よく喋べるお隣りが寝て淋しい夜

縣人會同縣藝者もてゝゐる

今日また巡査はこゝでお茶となり

東西屋きこかにケチのついた顔

十周年でかい借金してゐるけな

道具屋は立ちぎまるのへ箸を置き

冷氣相催し工場の笛も秋

○ 松山 前田 五健

御大典奉祝

ぢつとして居れぬ祝ひの渦が舞ひ

○ 魚崎 柴谷 柴舟

おしけなく草に座したる彼女にて

僕の名がハンドバックに仕舞はれる

○ 御影 長崎 柳秀

世間へは院長も來たやうに云ひ

戸締りは致しましたご夫婦ざり

氣晴しに唄ふに三味の音が淋し

橋一つ渡れば夜も宵の口

御返盃人の手前も憚からず

行水へ顔をそむける御用聞き

吸入をさしてゐる母も口をあけ

努力した積み木うれしい手を叩き

溺れたるかたち空瓶沈み行く

聞きされぬ儘に見學次へ行き

見學のさうでも見たい人を押し



月評【前號】

紋太 山雨樓
素人 ひろし

王子燒四五人の子にいそがしゆう
蜆狩日傘や下駄を揃へこき
の二句の方は軽い心持で味ふ事ができる。つ
まり内容の相違が原因であらうと思ふ。

素人 提出

今朝からは 新聞も来る新世帯

風流子

近作柳樽 紋太提出

お骨あげ焼けぬ玩具に泣かされる

壽枝女

紋太……この句は哀れな情景でもあるし、その情景を言ひ表はされてあると思ふ。けれども、この句にさういふ場合に、感じたと言ふ熱情が足りない點がおしまれる。只讀んで成程と感ずる程度であるのが惜しい。

素人……私もこの句は、この人の四句のうちで一番よいと思ふ「泣かされる」を何んぞかしたらいと思ふ叙法が單純すぎるのでせうな、そんな具合だから、實感が出て來ないんぢやないですか、もう少し表現法を練れば佳句になるだらう。

ひろし……亡くなつた子に對する 母親の眞

情を可成り出して居るし、見付け所として却々いゝ所があるが、悲しみの熱が足りないといまでも言ふのか下五の 燃焼さが足りないと思ふ。

素人……この作家を僕はよく知つて居ます。之は自分の子を死なしたり、親類の子を死なしたのでもなく、近所の子が死んで、そのお骨あげに行つた時の感じだらうと思ふ。だから緊張味が足りないのが當然だらう。

紋太……僕は叙法が悪いとは思はぬ。この句を讀んだ時に少しも 隙がないと思つた位で成程うまく言つてあると言つてもよい。併し内容が内容だから、この表現では餘りに、冷かな生温い見方をして居ると思ふ。その場所に居ないで遠くで考へたか、思つたか言ふ様な感じが濃厚だ。壽枝女さんの句では

素人……すらつさし句だ、如何にも新世帯らしい句。そして新世帯の嬉しさがよく出て居る。新世帯の新しいこぢんまりした埃の無い様な清楚な感じ迄が受けいられる氣がする。それは此句にさしすぜそつまり、行の五字がよく使はれて居る爲に、さういふ清楚な感が出て居るのではないかと思ふ。句作する上に於て、かう言ふ事は必要だと思ふ。文字から來る音律を考へて、同じ場合でも、すらつさした時には、すらつさした言葉を使ひ、こつし時には、こつし言葉を使ふ、好適例だと思つて提出した譯です。

紋太……本當です、僕も何時も、それを感じてゐる。併しそれを心に構へて作句する事は、却々出來ないものだ。常に心掛けて居て自然に出て來るものを見る、この句は新世帯の喜びがよく多くな言はずして、表はされて居る。佳句です。駄足かも知れないが、若し新世帯と言ふ題で作つた場合には、かうし

た句はよく見落される。つまり平凡と見做されて了ふ句かも知れぬが……。それだけに新世帯の句としてまだ奥がある事を思はされる。

ひろし……本當に綺麗ですれ、新聞と言ふ様な極く卑近なものにも、初めて持った新世帯と言ふものの喜びに浸つて居る二人にはそれが非常に珍しい出来事として詩情をそめるものである事を知ります。

ひろし 提出

松葉かきつゝ

歌つては淋しみぬ

城 月

ひろし……かうした短歌の様な氣分を表はした川柳をちよい／＼見る。朝の海岸の松原で高らかに歌ひたい様な、氣持をもつ若人が何んだかやるせない思ひに洗んで、世のあぢきなさを感じてゐるのではあらうか、單なるセンチメンタリズムに墮ちて居るのではなからうか、川柳の持つ深刻味から行けば、もう一步突つ込んだ感情の流露が欲しいと思ふのである。

素人……この句は餘りにロマンチックの奥味が勝ちすぎて居ると思ふ。俳句や短歌にはかう言ふのを飽きる程見せられて居るのでかうした雰囲気から逃げ出して行きたい、私は川柳へ飛び込んで來たのだ、作者の境地

や詠まんとする所は分りすぎる程、分るのでが、僕はかう言つた詩にはやゝ食傷して居る紋太……併し僕はかう思ふ。この句は割合に切實な感じが出て居ると思ふ。短歌にもある想ではあるが、川柳として、短くこの淋しさを歌つたのは、今迄の川柳ばかりを見て居た私として、却つて或る愉快さを持つ事ができる。併しかうした句を作るには、單に作るだけでなく、それを作るだけの實際の生活、その作者が持つて居なければならぬ、と私は言ひたい、只かうした情景を、句として樂む範圍であれば既に短歌に言ひ古るされた想であると言ふこと丈でも撤回すべきだと思ふ。

素人……婦人雜誌の口繪を見る様な氣がします。

ひろし……作者は自然そのものから受けた印象に於ては、もつと深いものを感じたのであらうとは思ふが……。

紋太……強がち排斥したくないと思ふ、(この時山雨樓氏來席)

川柳塔 山雨樓提出

渦を卷く波

生活に似てゐらし

冷 刀

山雨樓……或る生活苦を表はして居ると思ふ

それが上五の渦を卷くと言ふ表現で、如何にも慌しい落着きのない、併し何んだか苦悶を伴つた佻しい生活を、よく表はして居ると思ふ。联想の句として深く共鳴を覺て居る。

ひろし……作者が生活の苦しさを、高見から見物してゐるさしか私には感じられぬ。下五「似てゐらし」と、他事の様に言ふて居る爲めだらうと思ふ。

素人……之は、こしらへた句ぢやないかと思ふ。「渦を卷く波」と言つた字が使つてあるに拘はらず生活苦と言ふものが表現されて居ない。實際の生活苦の只中に座した時の感じは、とてもこんな香氣なものぢやないと思ふひろし氏の説の如く「似てゐらし」と言ふ叙法からさう言ふ弱い感じが受けられるが、「渦を卷く波」はこの場合に餘りに適切過ぎる爲めに實感が出て來ないのぢや無いかと思ふ。先刻の新世帯の時に言つたことと反對に「渦を卷く波」と言ふ音が、生活苦を形容すべく、餘りにさ／＼と聞けるのではないかと思はれる。

紋太……僕もさう思ふ。「らし」は餘りに生温い言い方です。句を讀んで見るゝ物足りなさ、先づ頭に來ます、内容を味はふて見るゝ

まだ充分に燃焼して居ない事を感じさせられる。

山雨樓……僕はこの場合、「渦を巻く波」そのものを主題として、自分の生活をふりかへつて見た作者、心境に共鳴したいと思ふのである。

勿論生活苦と言つた様な深刻な感じは、充分に受けられないかも知れぬが、只瞑想の句として作者の詩的な主観を或程度まで表現して居る様に思ふ。此作者の他の句を見ても受けられる様に、自分の生活をふりかへつて見ると言つた様な、心境は川柳家の眞面目なそして誰もが一度通らねばならない態度だらうと思ふ。

ひろし……私は作者が、自身の生活をふりかへつて見て居るのではなく、「渦を巻く波」を見て、世の中の生活に喘いでゐる人達を只軽く眺めて居るもの、様に思はれる。すら／＼とした表現の仕方が、さう讀者に観せしめるのだから、この意味なれば、可成り纏つた句であると思ふ。

紋太……僕もその意味にまつた、「渦を巻く波」の印象がはつきりして居るのに、下半が生温るく表現されて居るのが惜しいと思ふ。

「生活に似る」さ位に強く言ひ切りたいと思ふ。

ふが、さうして見るに「渦を巻く波」を生沽苦に、たゞへる事が既に平凡であると言ひたくなる。

山雨樓……併し句の感じは取材の凡、非凡によるばかりでなく、たゞへ平凡な取材でも、その調子なり、表現によつては、かなりの共鳴を齎らし得るのであつて、此句の如きも、解剖的に考へて見るに、一見平凡な様だが、一句讀みつけた調子なり感じなりは相當に捨て難いものがある様に思ふ。前月の月評會にも平凡さか月並さか言ふ事に就いて路郎氏の意見もありましたが、平凡のうちから生れる、非凡さと言ふ所に川柳家の又一つの使命があるんぢやなからうかと思ふ。どうも簡単に非凡を求めんとするが爲に所謂句をこしらへる、殊更に穿つた事を言ふさういふ様な傾向に陥ゐるのぢやないかと思はれる。かうした淡いうちにも、味ひ深い生活感情を捉へる事を心掛けなければならぬ事だと思ふ。

ひろし提出

満足の笑ひ

双手をあふれ出で

柳陽

ひろし……作者が非常に愉快な喜びに、溢れ

て居るさまがよく出て居ると思ふ。俳人放哉の句に

入れ物はない 兩手でうける

と言ふのがあるが、それは意味は違ふが又異なつたユーモラスな感じがある様に思ふ。

紋太……僕は「双手をあふれ出で」と言ふ事は笑ひそのものかと思つて居た。この句の叙法ではさうされると思ふ。

ひろし……無論さうなんです。

紋太……双手と言ふ言葉が非常にいい感じがします「出で」がない方が真いやうに思ふ。併し大体にこの句は説明的な氣分を多量に持つて居る。

素人……「出で」はおかしい「出る」さか「出」さかない方がいいと思ふ。併し乍ら説明の句さは思はれない、満足の笑ひが端的に表現されて居る様だ。併し乍ら一つ深みのない所がこの句の惜しい所ではないかと思ふ。満足と言ふものをもつて深い所からひつぱり出して來た方がよかつたんぢやないかと思はれる。之では満足の笑ひと言ふ事はうけされることが満足のひとつ奥が覗ひ難い。

山雨樓……僕も紋太氏の説の如く説明が勝

つた感じがする。そして一つの見方では形の上から革新派の詠み古るした境地をもつて来たもののやうに見られる。勿論作者の創作である限り何處迄も創意は尊重しなければならぬと思ふが、前の「渦を巻く波」と言ふ句と對照して作者のれらひ所が、新しい表現に生きんとして、新奇を求める穿ちに陥つて居るんぢやなからうかと思ふ。「即ち双手をあふれ出で」と言ふ見付け所がさう言つた感じを齎らして居るやうに思ふ。

ひろし……「満足的笑ひ双手をあふれ」と訂正して幾分形の上では説明的だと言ふ難は逃れまいが、この程度なら惡穿ちでもなく軽い句としてうけ入れられると思ふ。

紋太……この句を作つた心持はいゝと思ふ。

紋太 提出

子の寢顔

酒の肴になつてくれ

かほる

紋太……作者が嬉しい氣持で如何にも子供の寢顔を眺めたらしく、私にも感じられる、暖かくして落着いた氣持を尊敬する。

素人……かほるさんは最近初めての子を儲

けられたので、餘りに句會にも出て來られぬ様に思ふ。それ程初めての子に愛着を感じられておられる事さ、この句を思ひ合せて實に情愛がよく出て居ると思ふ。

ひろし……かほるさんの句をみて何時も思ふ事ですがかほるさんの句からは親しく話しかけられる様な氣持ちがします。一般に川柳家さ會へば「やあ君」「やあ」と言ふ風に親しめるのにも拘はらずその人達の句からはその人から受けるだけの親しみが起らない。それ程いまの柳壇の高低の句は空事の様にしか思へないのが多い、句がその人の人格の表現であるとするさ、せめて、かほるさん程に句に個性を出して欲しいと思ふ。

山雨樓……この句で思ひ出したのだが、僕の前大變敬服した句に。

子の寢顔短氣な事は思ふまい

と言ふ句があつた、それから確か川柳雜誌の募集吟「寢顔 松郎選」の僕の句に

年寄の黠深々寝入るなり

と言ふ句があります。

この三つの句を比較して川柳の視ひ所と言

ふ事を簡単に考へて見たいと思ふ。

「年寄の句」では主として穿ちを求めて居ると思ふ。「短氣」の句では、作者の意思思想が言つた様なものを多分に含んで居る。

子の寢顔酒の肴になつてくれ

殊に、この句に至つてはありふれた生活感情そのものを表現して居る様に思ふ。そこで川柳家各自の個性表現を求める上から、前の穿ち味の勝つた「年寄の句」をより多く好み且つその方に勝れた意義を持つて居るものは、他の思想さか純情さか言ふものを輕視する傾きがあり。反對に純情を本位におくものは、さういつた穿ちを極度に排斥する氣持になつて居る様に思ふ。併し詩の第一歩としてはかういつた純情そのものを表現したものが先づ生れるべきもので、それが段々に色々な考へを加味された結果、穿ちやら、思想やら、這入つて居なければ、幼稚なもののように思はれて來るんぢやなからうかと思へる。兎に角、この句に就いてさう言ふ事を考へ合はせて見る氣になつた。(龍就記)



石炭路集

(募集句)

石炭 森東魚選

内風呂の石炭に母咽せて居る 虚白
 石炭の煙は名所に拘はらず 光路
 石炭のその一塊に似し男 與詩夫
 職長の目に石炭をたきすぎる 露斗
 石炭も擔いだき云ふ立志傳 東狂子
 貯炭場の陰に屋臺の餅を賣り 同
 石炭を積んだ列車の長いこと 忠八
 此上は海に石炭掘つてゐる 太路
 曳船で来る石炭の沈みそう 白柳子
 石炭の山に群れ飛ぶ朝蜻蛉 綠之助
 石炭の山へ集まるストライキ 幸泉
 木戸へ來てから石炭屋重たそう 白眼子
 ぢり／＼石炭煮ゆるやと燃え 同
 石炭が來たか會社から戻り 柳秀
 石炭が混る火鉢の臭さなり 菊三
 石炭を暖爐について丁度晝 觀月
 評。座五「もう時だ」チト蕪雜だ。直した
 のは意味は多少違ふが、作者のねらつ

た気分は出し得ると思ふ。
 炭坑を逃げた話を自慢にし 唯一
 評。原句座五「自慢がりに通じない事はないが、變だと思ふ。
 橋上の石炭一ツ蹴りこまれ 光路
 評。「橋上」はもつと樂な言葉はないか。類句を考へるもの二はあつたが、比較して此の句を取つた。
 石炭にスコップ立てゝ晝になり 銀水
 評。原句「立てゝ晝さがり」晝さがりは晝過ぎ三時頃の休憩時を意味するのであらふが、どうも、しつくりしないので直した。
 工場裏石炭の間ひ道があり 新水
 評。原句「間に道があり」。どうも單に記事的で、説明的で面白くない、此の様な時は寧ろ「テニハ」を略した方がより感興的な表現になり得ると思ふ。ほんの僅かの事であるが。

川柳家の戸籍調べ

□ 係 ひろし生

(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八) 好きなタイプの女 (九) 自傳の句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配遇者の有無 (一二) 嫌ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月

(206) 青山孤舟

(一) 青山佐太郎 (二) 孤舟 (三) 無し (四) 大阪市北區河内町二ノ五 (五) 明治三十四年貳月四日生 (六) 海產物商 (七) 路部先生及先輩諸氏の句に澤山御座います (八) 優しさの有る女 (九) 御座いません (十) 野球、讀書 (十一) 有り (十二) 取り立て言ふ程のものは御座いません (十三) 昭和貳年初旬句會へは献句祭より

(207) 靜香忠八

(一) 靜香忠八 (二) 本名で押し通すつもり (三) 無し (四) 大阪市此花區中江町一一二番地 (五) 明治三十七年九月二十八日 (六) 局員 (七) 多數に付き指摘し難し (八) 肉感的で温順な女 (九) 投稿せし句皆自信なければならぬ (一〇) 短歌、俳句、洋畫 (十一) 有 (十二) 思想的に干渉する者、暴壓、擄取 (十三) たしか大正十五年十月頃でしたと思ふ。

石炭怒に似てさみしいもの。戀^{こひ} 皮骨人

評。選者青年の折り「川蒸気、川に捨て去る石炭の其燃^もはかすに似たる淋^{しみ}しさ」と云ふ歌を作つた事がある。爲めに此句捨て難く思はれる。

石炭の荷車今に崩^{くづ}れそう。正吉

評。表現はちと不充分だと思ふが、ゆられゝて積み重りした石炭カマスの有様を詠み得てあると思ふ。

うつかりと散歩石炭置場へ來。松月

評。此原句「散策が石炭置場まで延びて」であつた、原句の面影のないまで直してしまつた。かゝるものは寧ろ没にすべきであるかもしれない。が作者の着想がすてがたい。ここで私は殆ど自分が句を作るつもりで色々をやつて見た、結果かうなつた、恐らく作者の云はんさした気分は出し得たのであらふと思ふ、即一般の参考に供する考で選に入れる事にした。

開會のストロウに石炭つき足り。たけし

評。原句「ストロウに石炭を入れ開會す」である、矢張り記事的であり説明的である、が作者は「開會」に際しての気分はさらへてある表現が不十分なのだと思つた。で變格調でかう直して見た

石炭を赤帽序でらしく入れ。正春

評。原句序のやうに入れ

石炭を運ぶ風呂屋の横があき。陽臺亭

評。原句運ぶに風呂屋横をあけ」どうで

もいいが、一寸直したのである。座五蕪^わ難な様であるが、却てのんびりした滑稽味があると思ふ。

満されぬ心コークス踏んで去り。鐵庵

評。労働爭議の一場面であらう。座五

行くであつたが「去り」を直した「去り」の方が光景を強く描き得るやうに思ふ。

うつちやうな様に石炭トロが有り。雨月

評。原句「トロが置き」は「トロ置かれ」でなければ整はない。簡単に「有り」でよからふ。

難船のやうに石炭船曳かれ。伴内

原句座五「繫り」。

石炭の貨車は邪慳に突き放し。多聞

原句座五「放す」。

石炭庫返事のこゝに眼が光り。一舟

原句「答へた方に眼の光り」。

宿直の焚く石炭は惜氣無し。可樂

原句宿直は石炭だけは惜氣なく

石炭馬車がつゞいて北が吹き。草明

原句「……吹く」。

そうぐしく石炭給仕で行き。恒子

原句「……小使」

ストロウの中で石炭怒つて居。同

評。小供らしい、無邪氣な見方がいい、作者がほんさに小供なら尙いゝ。

選後に。題詠には、どうもさけ難い事であらうが類句がかなりあつた。

(1)溝越へる馬力石炭こぼれて居

色 短 畫 俳 其 紙 冊 帳 卷 他

和 正 堂

大 阪 市 東 區 土 町 二 丁 目

電 話 本 町 一 〇 四 六 番
播 替 大 阪 九 一 七 五 番

(2) 荷車の石炭少しづつ、落し

(3) 石炭をこぼして馬力曳いて行き

(1) は「溝越へる」さ云ふ瞬間の動作に對して「こぼれて居はいけない」「チトこぼれ」さ何さかせねばなるまい。(2)も「落し」より「こぼれ」の方が宜しからう。先三句の中では(2)をこぼせばさる。

(4) 石炭の船洗みさうに積んで行き

(5) 石炭船曳船は重さうに曳き

(6) 洗みさうになつて石炭船がつき

及び選に入れた。「難船のやうに……」「曳船で来る石炭……」さあつた。比較して二句がすて難く考へたのである。

(7) 炭坑を出て太陽の明る過ぎ

(8) ……出れば明るい世界なり

天 井

叱られるまで天井へ毬を投げ
シヤンデリア此の天井もさすぞ来
夜が更けて天井裏の戀になり
木のさける音天井を越して更け
萬國旗の中から天井見わたる
天井の低さに馴れた船世帯
天井へさかさまにつる自轉車屋
公園で青天井をふみ眺め
武徳殿なんこ天井高いこ
天井の高さへ欠伸屈き兼ね
天井を葉巻こバットもつれ合ひ
今宵又天井が變り旅に慣れ
引越して来て折鶴の舞ふ天井

菊 二
眠 聲
雪 峰
光 路
吐 句
新 水
正 吉
松 月
桂 風
たけし
黄 彩
陽 亭
與 詩 夫

(9) ……まぶしい……

と殆ど同じのもあつた。

(10) 石炭を投げ込む火夫の顔が照り

(11) ……顔は燃え

此も全く同じである。

それから全く狂句仕立さ考へるものもあつた

石炭やの煙十八色白し

……顔の白いこさ

文化、文政以後のわるい句法になぜ立ち戻るのであらう。作者の御一考を煩はしたい。尙

三年間石炭ホリも黒くなり

さ云ふ狂句もあつた。

妄評多謝

(軸) 石炭を焚かうさ飯へ誘はれ。東 魚

矢 田 冷 刀 選

天井を仰ぎ思案に餘つて居
天井の低さ地下室灯がさもり
よい智慧も出でずに隠す天井裏
贅澤は天井板にまで及び
天井を差しあげてゐる大欠伸
氣安さは天井を低く突きあたり
ゴム風船天井へ弱く突きあたり
シヤンデリアいきなりテアブリ
甚五郎の粗忽にしごく智恩院
蠅船の天井床さ共に揺れ
天井の低さに馴れて四十才
云ひ負けた方が天井へ眼を移し
天井もベンキ塗られて假事務所

東 狂 子
東 狂 子
夢 一 佛
菊 路
青 水
多 雨
月 内
伴 大
路 舟
一 舟
縁 之 助
幸 泉
千 鳥

(208) 坊 野 壽 山

(一) 坊野壽三郎(二) 壽山(三) 赤井卷十三郎南山(四) 東京新井町新井宿一、八七一

(五) 明治三三年九月九日(六) 書籍化粧品樂器商(七) 澤山あり(八) 日本古來の鬻

の女ムシロ傳法肌のもの(九) いさかひにその襟足を見せ呉れは近作自信のもの

(十) 澤山あり、十一有(十二) 大正五年の夏頃川柳三男會の席上

(209) 吉 村 大 紅

(一) 吉村三郎兵衛(二) 大紅前方北魚こつ

けてゐた(三) 春星堂(四) 大阪市南區饅谷

仲之町廿三番地(五) 明治三十三年三月卅

日午前三時三十分三男に生る(六) 倉庫賃

貸業(七) 人の心を長閑にし豊にするよう

な句を好む僕も其の心して作句をしたい

と思つて居る(八) 先づ色白くして所謂千

兩さいてる日本人九夕燒のしまはれて

ゆく(一〇) 差しして趣味なし(一

一) なし(一二) 特に酒ミ雷(一三) 大正七

年春頃

(210) 上 杉 樂 鳥

(一) 上杉信義(二) 樂鳥(三) 大宗庵(四) 大

阪西成區有樂町四八番地(五) 明治三十六

年六月十八日(六) 會社員(七) 別になし(八)

八面長な髪濃い中肉性若い女で涙も

ろい面白いこを云ふ大好き(九) 心中

の足にくくこむ赤い紐、自信の句でしよ

う(十) 俳句、短歌、都々逸、音楽、キネマ

入齒

眼隱子選

入齒した母を嬉しく取圍み
總入齒若い話に飽いてみへ
悪くない反齒に金を被せて
老の愚齒を齒の揺みよはじめ
當分は齒を噛み合せ噛み合せ
總入齒海草の味を思ひ出し
入齒だ云はれたくない若さ
再縁の話金齒が光つて
井戸端でみるは餘生の入齒なり
この年をまだ執着のある入齒
折角の入齒白さが氣になつて
よく伸びる餅に入齒はちこ困り
妹も金齒入れたい齒をみせる
そら豆の食へるを入齒嬉しが
入齒から綺麗な齒並狂つて来
入齒ちこ仰山らしく笑うなり

(五客)

停電の機寸に浮かぶ金入齒
ちこ金を残せ入齒みつけれ
入齒なごして惚れられてゐる
薄情に光る女將の金入齒

白眼子
光路
柴野
吐句坊
穂波子
突支坊
銀水
南生
柳狂
與詩夫
鐵洲
雨月
伴秀
柳春
正春
休歩

柚蘭坊
卯生
露斗
同

西中
本川
三眼
笑隱
子
共選

父入齒外せば本當の年になり
 (人)入齒の多い母へ羊羹
 (地)小鯛食べて入齒に骨がひび
 (天)惡友が笑こみろこ云ふ入齒
 又しても入齒をはづす二三日
 入れた齒へじき舌の尖さはる
 入れた齒云はれこもない若
 美くしい齒並を褒めりや入齒
 總入齒はすした母の祖母に似て
 寢顔寂しく入齒露はに
 大欠伸恐ろしい程金齒なり
 入齒を洗ふ父の淋しさう
 入齒する子へ母附添ふて
 入齒して妻の豫算の狂ふて
 疑へば入齒はづして見せるなり
 入齒して歸れば子供不思議がり
 妹は金齒入れたいこを見せ
 入齒ぐらいせよこ人から云は
 前身を金の入齒が語つて
 總入齒昆布へ齒形いれて出し
 保護願ひ金齒の事を云へひ添
 眠聲
 露斗
 桂風
 狂子
 選
 光路
 雪峰
 銀水
 正春
 黃彩
 卯生
 虛白
 清一
 吐句坊
 松月
 桂風
 可樂
 伴内
 鄉川
 雪柳
 一舟
 鐵庵

(錢拾部一價定)

◆

町河白縣島福
路小土番字

會柳川北東所行發

我れ戀を語らん金の入歯して
變つてゐるこゝを金歯に見せても
未亡人入歯こはれたまゝで老ひ
入歯チト仰山さうに笑ふなり
嚙みしめた入歯に孫をにゑ得ず
入歯ですかいナミ箸の手を休め
嫁の歯を笑ふ姑の達者なり
總入歯へんてつもななくはづさ
嫁入前母も金歯をするこきめ
金入歯丈夫な歯まで抜いで入れ
羨まれて實は入歯で胃が悪い
折角の入歯の白さ氣にかゝり
マラソン、野球、茶花、山巡り(十一)無
(十二)タバコ(十三)大正七年にやり一時
止めてゐましたが今年の春から復活。

川添成美

(一)川添成太郎(二)成美(三)ナシ(四)港
區高尾町一丁目三五地(五)明治卅八年五
月十日(六)吳服七(七)さし上げた子が死ん
だとは思へない(八)中肉や脊の低い方
下町風の桃割(九)ナシ(一〇)観劇、野球
(此れも其の内の一)カフエー歩き(一
一)ナシ(一二)蛇頭の髪臭い女モダン
ガール(一三)昭和二年三月

馬場蹄二

(一)馬場慶三(二)蹄二(三)三田米吉、田
畑千三、無銭洞主人、福泉居士(四)大阪
西成區粉濱町本町四ノ五六(五)もうすつ
かり忘れてしまつた程昔(六)ナシ(七)

老夫婦入歯のこゝでもめてゐる
再縁の氣乗は入歯するこきめ
この金歯十五の春に入れたら
朝風呂の隅に入歯は忘れられ
義歯さつて笑ひ直して笑はれる
針箱へ入歯仕舞つて縫ひ續け
たくわんこゝを入歯はかみわら
總へ歯笑ふ歯ぐきに隙を見る
總入歯嚙んだ固さを手でぢぎる
一本の入歯をながく通はされ
そら豆を食へる入歯をうれし
涼しさは入歯外して吹かれてる
その中に入歯したのがよく喋り

邦 郎 南 生 たくし 突支坊 白眼子 幸 泉 同 柳 秀 同 多 聞

これ程の腹立を女堪忍び、縁天(八)ふつ
くりこした、愛嬌のある心の温かい女(九)
九)さて、あるのかないのか(一〇)あ
まり多過ぎるが堂に入つたものなし(一
一)死んで別れたあこは淋しい(一人者)
二)キザな奴、テラウ奴、ヘッラウ奴喰べ
物其他ではなし(一三)大正になつてから

堀口塊人

(一)堀口徹郎(二)塊人(三)天機もらすべ
からず(四)大阪市西區土佐堀通一丁目二
四五不明(五)會社員(七)吉原は知行に
もつたたい(八)電柱は都へつやく懐し
さ(八)虞美人草(九)の糸子(九)問ふ方が無
理に候(一〇)酒さ女放浪癖(一一)持參金
つきの御世話願上候(一二)蛇さ人間さ市
電(一三)不明

▼川柳家の戸籍調べ は多大の好評
をうけて來ましたが、本號掲載のもの迄

ではらく休載の事に致します。また新
しい計劃のこゝに諸士にまみゆるのであり
ませう。御回答を煩した諸君に厚く感謝
致します(ひろし)

年賀名廣告を募る

▼奮つて申込まれたし

一口 金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一口分の原
稿はなるべく簡單にお願いいたします
廣告料金は前金のこと。

申込期限十二月五日迄(新年號)

大阪市住吉區杭全町六〇三

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇

寄贈雜誌

▲みちのくやなぎ樽研究▲あけぼの▲
▲鯢鉾▲大豊橋▲文教の朝鮮▲譚談俱樂部
▲詩草▲ゆうもあ▲鼓▲ねこ柳▲すずめ
▲川柳▲天満宮社報▲土▲紙魚▲昭和
▲藝術▲週刊朝日▲きやり▲警察堂報▲早
春▲たまたむし▲媛柳▲東北川柳▲岳友
▲番傘▲婦女世界▲文藝▲朝鮮財務▲國語
▲國文學▲通▲藩陽▲家庭の教▲卓球タ
イムス▲めだま▲太湖▲水原▲川柳三昧
▲かなめ▲鴨綠江▲面月誌▲影像▲專賣
▲通報▲滿洲▲葵▲神有月▲硬球▲税
務通信▲黃海▲漫畫雜誌▲拍子木▲梅む
らの夕▲關西詩歌▲歌劇▲芦蟹▲京▲文
藝塔(對着順)



『川柳年中行事』に就て

西 原 柳 雨

母袋光雄、佐方隆の二氏は殆んど同時に早々

弊著「川柳年中行事」中誤れる點々を指摘して垂示せられた其内より如何にも御明説さ

感じたものを列擧して滿腔の謝意を表する

次第である但し誤字誤植等は外にも随分あり

りますから他日纏めて正誤したいと思つて

居り升。(昭和三、九、十五)

二頁、大木を持つてせなアは江戸へ出る

五頁、半月の松万木にすぐれたり安(安)

母袋氏——二句共清元老松の文句取さあ

れども文化十一年に初代延壽太夫が清元

を創始した以前の句だから甲は謡曲老松

乙は同高砂の文句取さあるべきであらう

一〇、元より樂の酒なれば井戸へ投げ(化)

母袋氏——猩々に此文句なし、佐方氏——

菊慈童の文句取

三一、酔つたので附ケ掛をする年始帳(明)

母袋氏——餘計な事を書くか、佐方氏——

同説

八四、萬歳は雜煮半ばの春の興(明)

佐方氏——謡曲盛久に「酒宴半ばの春の

興」の文句あり

八五、呼立をするさ何萬歳も来る(天)

佐方氏——何萬歳かは幾組もの萬歳なら

ん

二二、落ちさうな鼻を團子で附けてやり

佐方氏——笠森、柳雨曰、成程御考感服

併し土さいふ字が何處にか一字欲しい氣

がする?

九一、萬歳中がより歳三下がより(天)

母袋氏——中音のかよりを謡曲の方では

中がより云ふ

二四三、一人のを買ふさつばなの穂を描へ

佐方氏——私のものゝ大勢つばなをつ

づける

二四八、羽衣の癖は野拭にうつてつけ(明)

母袋氏——癖は原本くせではあるまいか

羽衣のくせに「春霞たなびきにけり久方

の云々」さある

佐方氏——曲字正當

二五二、下女がおもても白々さ花の朝()

佐方氏——謡曲三輪の文句取

二五八、紫の外へ花降り琴聞は(安)

母袋氏——謡曲羽衣に「虚空に花降り音

樂聞に云々」さある

三〇、五月雨が晴れると鯉の竹のぼり

(安)

母袋氏——竹のほりはたきのほりの洒落

三五一、饅頭を足にのみ込む麴町(天)

母袋氏——饅頭は象の食物と彗星二年四

號にある

三六四、うるさくてどうもならぬと難を出

し明)

佐方氏——土用手ではなく三月節句前であらう

六六〇、千鳥かと思へば蟹が文彌也(政)

母袋氏——破禮句でせう、柳雨日御同感

です、併し強ひて文屋の泣姫とせず拙著「江戸歌舞伎」(六三〇頁)にも載せて置

きましたよろしく御推察を願つておく

六六七、船頭は男ばかりな八日漕ぎ(明)

佐方氏——深川八幡の角力だらう、柳雨

曰く成程明解と思ふ

六七四、元結を切るを駈出す大三十日(一)

佐方氏——忙しき髪結

六七四、年禮は預け過して来た衛門(化)

佐方氏——喜左衛門は空腹のこゝ、柳雨

曰一度調べて「川柳辭典」には明記し置き

ながら忘れてゐた御注意により思出して

慚愧に堪へぬ兩國の名主喜左衛門といふ

人草津へ入湯の途中二人の駕昇共が互に

喜左衛門くさいふのを聞いて同じ名が

三人揃うたに驚いたさいふ風俗諺報の抜

抄まで添へて居ながら……

六七九、大さこを寝てござくを拂ふ也

(明)

佐方氏——大所は富家寝ては横に寝る(

物を借りて返へさぬ義)

六七九、福右衛門など、市兵衛名をかへる

(天)

母袋氏——大黒を盗み得た市の客、佐方

氏——同説

川柳鬼門三則

庄 萬よし

温訥獸川柳のこと

天王寺動物園の温訥獸は終日(或は終夜

かも知れない)横轉逆轉休養することを知

らない様に十坪の池を泳いでゐる、見

物に媚びる如く首を上げたり、乃公この

藝ありと岩へ上つたりして得意なものを

である。併し半時間も見てゐるに其の動

作が千遍一律で獨逸製の手足を動かす人

形と大差ないのに驚く。十年一日の如く

さいふのは理想の門衛の形容詞だが柳人

が温訥獸式に同じ池をぐるぐる廻りせら

れちや遣り切れない。

萬歳川柳のこと

腹案があるさいふのでもなく、理想があ

るさいふのでもなく、研究したのでなく

體驗したのでなく、五分でべ切の聲を聞

いてからでたらめの即興で三句を繰めて

天才顔をしてゐるのを萬歳川柳と稱す。

子守や。車夫の喝采を買ふても、識者は

顔を背ける。戀に苦しめば、戀の句は

出来ない、貧乏に泣いた事がない人の貧

乏の句は虚言である、惡魔と闘ふたこと

もない僧侶の説教は空念佛である。人一

倍苦しめば佳吟の生れる譯はないでな

いか。

野孤禪川柳のこと

大賢は愚に近し、禪の正なるものは肉を

喰ひ酒を呑み、よく笑ひよく泣く。いやに澄まして悟つたらしく、半解の術語、新語を振り舞して作句家元はこしらで御座い、手前作句の外は川柳の質物なりミ氣取るを野狐禪川柳ミ稱す其の醜、温訥獸川柳萬歳川柳以上である。川柳の本義は愛他的であり犠牲であり一生が勇猛精進でありたいものである。

(九、一五)

秋を前提して

中川眼隠子

秋を前提して文章では『秋が訪れる』ミ云ふ優しい修辭をつかう。川柳でもよく見る。又俳句で『秋迫る』で座五を結んだ句がある。

僕は『秋迫る』ミ『秋が訪れる』に就いて苦駄らないやうだが、次のやうなことを考へてゐる『秋が訪れる』の優しい言葉を依つて直ぐ、秋、桔梗、菊、萱、女郎

花の所謂秋の七草や澄切つた月を想ひ浮べる。

秋を心待ちにしてゐた詩人の心持をも認めらるゝ反對に『秋迫る』ミ云へば、夏も果てた、其のうちに秋も終る、雲が雨戸を叩く……………雪……………そこは『秋が訪れる』の場合よりもつミ廣い一般的な生活を聯想せしめる、だから『秋が訪れる』『秋迫る』の文章の一句を一般生活に即した、日常用語化するミすれば『秋が訪れる』は表日本に住む人達の口を衝いて出る、『秋迫る』は裏日本人間の口を開かしめるように思ふ。

然し是は北國人の雪に對する一般の苦勞性で北國に住んで居ても僕のような利那を樂しむものには勿論、秋は四季のうちで一番おつミりしてゐて好い。

おつミりした氣温がまた、感情を内省的に動かせるもの、兎に角秋ミ云ふ自然が詩人を誘惑するのか、詩人そのものが秋を憧憬して歩み寄るのか、さつちにして

も秋は詩情の湧く時である。

× × ×
當地の詩人、酒井雅樂頭氏に

行く先へ着いた氣がする九月一日

の句がある、僕は秋風の動き初める頃になるミ直ぐこの句を想起しては口號む、そして、かく迄も詩人の心境を如實に詠み現はせ得たものかなミ、激賞止むミころを失ふ。

土用三郎から秋風吹くミ、古來から云ふが土用三郎はまだ照込みの最なかである虫が鳴きだした、八月廿一日まだ形式に捉はれてゐる人間は、夏の意識を捨てない九月一日完全に、秋そのものを捉へた書畫を鑑賞する氣持も、音楽のメロデーも、カフエーに大理石の食卓の冷たい感觸も、カチンミ響くホークも、昨日ミまるで異つて、すべて秋ミ云ふ觀念を得たなんミ印象的な句だらう。

唐柳短解

蛭子省 二一

た碑が今もある我輩の信する處では、木牛は十輪の輕便車的一種であらう、これは今でも支那の各地に行はれてゐる。流馬は谿流に浮べられた、特殊な携帶の出來る輕便な筏ではあるまいか』云。

(一〇四)楊貴妃湯女に仕立てる驪山宮

白氏文集長恨歌に詳で、謠曲の『楊貴妃』は、先づ直譯式のものである。『昔は驪山の春の園に、共に詠めし花の色』云あるは、皇帝が妃と同事で、驪山の清華宮に遊ばれた追憶である。三秦記『秦の始皇、驪山に至り神女と遊ぶ。而して其旨に忤ふ、神女且つ之に唾す、遂に瘡を生ず、始皇怖れて謝す、神女爲めに温泉を出し、而して洗除す、後人因つて以て驗と爲す』古來驪山の温泉と稱して有名なもの。玄宗が比翼連理の語らひの跡は貴妃湯といつて楊貴妃の浴槽があるそう云ふ。

箱根七湯の一つなる塔の澤に、水戸黄門が朱舜水と遊びた折り、山容水態、洵に驪山に優れり云、勝驪湯の名をつけた話

(一〇二)鄭聲と利口を憎む國家老衛靈公に『鄭聲を放ち佞人を遠ざけよ、鄭聲は淫なり、佞人殆し』云あるが、此の句は陽貨篇の『子曰、紫の朱を奪ふを惡む、鄭聲の雅樂を亂るを惡む、利口の邦家を覆へず者を惡む』云あるから出て居る。詩に鄭風篇がある。鄭の國の音は淫猥極まるもので、人心を亂す、利口は佞辭即ちオベンチャラの事で、國家老がお妾を憎むの情を材料にした作は餘りに多過ぎる。

鄭衛之音、亂世之音也、比於慢矣、桑間濮上之音、亡國之音也、其政散、其民流

(禮記)

玉のこしがらひきなるす國家老國家老やばないふのも役目なり猫股を退治てかへる國家老

(一〇三)舌を巻く舌を巻く魏の軍使

もある。塔の澤の句三つを附して置く。

塔の澤長湯して聞く鹿の聲
塔の澤蚊屋を持つてくる案内
今鳴いた雉子うりにくる塔の澤

(二〇五)二十軒一度笑は百これる

一さきに百つ、笑ふいい女

長恨歌中の一節に『口頭一笑百媚生、六

宮粉黛無顏色』

一たび笑むと一分さる婆々あなり

なごも胚胎して居る句である。

(二〇六)いまだ知る人なり隱居かひ

謠曲『楊貴妃』に『假に人界に生れきて

楊家の深窓に養はれ、いまだ知る人なかりしに』の文句取ではあるが、其の源

は長恨歌の『養在深閨、人未識』から出

てゐる。

(二〇七)お多福に顔の美しさ

金轡はめて餘の妃はのらぬ胡馬

馬上の琵琶で讒筆をかこち事

毛延壽頼も赤くもどるなり

王昭君の句は非常に多い、四句に止めて置く。

明妃曲

白居易

漢使却回憑寄語

黃金何日贖蛾眉

君王若問妾顔也

黃金何日贖蛾眉

莫道不如宮磨時

漢の元帝の竟寧元年に、呼韓邪單于來朝し、漢に婿たらんことを求む。帝は後宮の女を畫工、毛延壽をして描かしめ、醜なる者を遣はさむと云ふ、宮女達は皆毛延壽に賂を贈つて、美しくかゝむ事を希ふ、然るに王昭君のみ其の事をなさず、遂に醜婦と描かれて匈奴に嫁く。後ちに帝絶世の美人たるを知つて悔れ共詮なし、昭君匈奴にて帝を怨み怨思の歌を作り、藥を飲みて死す、胡地の草色皆黃なり、唯昭君墓上の草獨り青しと傳へらる。昭君が畫さ短夜の旅寢かな 蕪村

松島氏の漢の畫家毛延壽の一節をぬく。

『前漢元帝朝の畫家毛延壽は、扶餘若くは犬戒民族を祖父させる歸化人である。彼は傳神畫家として當時第一人者の名聲を有し、從來の人物畫風に一新生面を展開した。西京雜記によれば畫人形醜好老少必得其真とあり、所謂寫生畫の妙致を極め、其美人畫の如き眉目生々容姿楚楚殆んど相語らんとするが如きものがあつた。而も彼の描寫は從來の硬貞線描を一

變して蘭葉描を以てしたるが故に殆んど傳神の妙を發揮した。後世晋の顧愷之や唐の吳道子や宋の石恪なごの大家は、實に人物畫の畫聖として毛延壽を追懷したのである』斯る神人の筆で醜女に描いたのだから後宮第一の美人も形なしである延壽は長安市中、膾炙斷骨の刑に處せられたのである。

(二〇八)走さんたり息子四枚肩

論語雍也篇、子曰く、孟之反、伐らず

奔りて殿し、將に門に入らんこす、其馬

に策ちて曰く、敢て後るるに非ず、馬進

まざれば也。

四枚肩の四ツ手駕に對し、淡い洒落が

ある。

(二〇九)梨花一枝ちつと雨舎り

白樂天の長恨歌に、梨花一枝春帶雨の句

がある。謠曲の『楊貴妃』には『梨花一

枝雨を帶びたる粧ひの、太液の芙蓉の紅

『云々』轉用して居る。

(續)



各地柳壇

川柳雜誌社 柳翁忌

九月二十二日午後六時半より日本橋俱樂部に本社、柳翁忌を營む。席上路郎主幹かお彼岸の天王寺詣りの漫談をさき腹をかゝりながら川柳味のある面白さを覺れた。
(ひろし記)

參會者 路郎主幹、桂風、悟空、琴人、瓢三太閣、露斗、素人、一杉、萬年青、八專、丸葉、鮎美、觀月、源坊、稔、文蝶、孤舟、二天、双葉子、柳狂、萬よし、炭車、柳人、靜馬、里十九、加香陽喜亭、賀名芽、吞陽、柳笑、浮草、舟々、翠峯流星、亂耽、突支坊、三笑、紋太、毒仙、革郎、二柳子、ひろし

兼題 彼岸 紋太 選
お彼岸におぼんさ歩く久しぶり 鮎美
彼岸の空が映る風船 亂耽
約束の秋の彼岸に降りました 一杉
彼岸會に今年も詣る御長命 露斗
お彼岸を坊主に化けて居たりけり 素人
命日が彼岸に這入つて嬉しかる 柳狂
引導鐘ついて彼岸をつゝがなし 双葉子

お寺さん彼岸のお布施かるう受け魂へ彼岸の鐘が突き當り彼岸會の塵芥の中の胸すかし逢坂の机に惜しいお人柄お彼岸に母娘は柄を話しあひ(人)彼岸の中日に顔が一つ咲き(地)彼岸もう今日で仕舞の莫座を敷(天)彼岸志を配つて丁稚休みなり

素人

熱情さ熱情飯が吹いて居る君ぐらい熱があつたらやれるだろ熱だけは認めてやるさ父は云ひわかり切つたことにメートル上居る八度九分髪はこんなに抜きました熱があつても妻は飯を炊く熱だけは下りました髪をさき脱稿へきまつたやうに熱が出る發熱を押して責任やつて来る熱高く眠れぬ夜の底にある智惠熱さきめて漸う靴を穿き熱あり過ぎて臍首さなり

琴人 稔 吞陽 炭車 同 賀名芽 文蝶 舟々 選 吞陽 桂風 里十九 一杉 萬年青 翠峯 三笑 源坊 柳笑 稔 毒仙 革郎

席題 舟

萬よし 選

この次の巡航船で歸る父涼み舟橋から見てる程でなし舟一つ入れて二人は寫される此の舟さおれは行動共にするスカートへ太平洋の風もよしかけなちの錨を巻くがもどかしい船世帯朝の煙が橋へ延び死んだつていゝわさ女沖で云ひラケットにたのまれてゐる船世帯舟べりへ船頭なれた足を乗せ棧橋へ着くさ大きな船になり曳船は喘へぎ／＼の煙を吐き中程の日傘の目立つ渡し船繪日傘のもうボートにはこりた顔船の着く度村の子が減る船唄がされて新派の暮になりラゲオもう日本語でない船のゆれ

亂耽 舟々 觀月 ひろし 同 紋太 同 琴人 同 萬よし 同 素人 三笑 賀名芽 柳人 柳人 素人 文蝶 琴人 悟風 孤舟 瓢三 丸葉 毒仙 同 天

互

同溪同亂同柳同素同陽同二同武同鮎同吞同狸同雅同孤楡悟露丸萬山
花坊耽狂人喜亭南子美陽仙流杉舟空斗葉よし雨樓

下
庶題

互

白萩騎下駄の音近うなり
足の形はつきり付いた下駄をぬぎ
下駄箱を本箱にする變り者
杖のせて下駄音人を待つてゐる
桐の下駄都になれてはき初め
泣いてる子父さんの下駄はいてる
高下駄は道頓堀を素通りし
下駄だけは買ひのを履いて行くは
履癖で母お轉婆にしてしまひ
先妻は下駄を引摺る癖でした
玄關に脱ぎ捨つた下駄氣にかゝり返
妻病んで借下駄泥のまゝ返し
下駄いるくくに花札の音
下駄を履きく念を押してる
下駄洗ふ手先は秋の陽が伸びる
歪んでても自分の下駄の履き心地
そら耳がなかつた下駄の音へ立ち
塗り立てのセメンへうう下駄を入る
簾表犬こゝろよく踏むで行き
極道は下駄から見てもよくわかり
停車場へう丁で下駄が割れた
手でこめ乍ら駒下駄で走りより
お隣へ見は下駄履きで上つて來
風呂行くの下駄を女房に教へられ
大股に下駄を脱ぎ捨てる子が戻り
店へ來て下駄を揃へる親旦那
見えない下駄に子供はおおななしい

選 同 同 刀
 たけし
 雅流
 柳狂
 萬年青
 柳人
 悟空
 かい
 柳十九
 里河樓
 加香
 鶴峯
 伊佐美
 愚陀
 孤舟
 稔
 蒼梧樓
 柳笑
 吞陽
 彩秋
 素人
 石竹
 塊仙
 山雨樓
 ひろし
 惡源太

金持ちの家で冷たい下駄を履き
ちびくれた下駄に思案は減^マり行き
夜遊びはいつもの下駄をつゝか
朝戻りおのれの下駄の音がする
下駄さうの子供は濡れた顔を見せ
よ土産の下駄を疊の上で履き
よそ行きの下駄子供ははきたり
ほるような下駄に直^ス屋もてあき
退院の芝生へ下駄の履き心地
京の旅歩き疲れた下駄を脱ぎ
褒められて玄關の下駄揃へさき
いゝ下駄が並び諺の會があり
下駄札に運命論を持つ男
わが一生よ下駄の齒に似る
幸福はこゝにもあつた新ら下駄
下駄はいて男同志がにびくらず
彼奴の下駄はほつさいて行く
下駄見れば買はればならぬ月の末
下駄の齒が飛んだ處へ電車が來
吾妻下駄しつくり土にあふ響き

二南 革 露 溪 陽 同 丸 同 點 同 嶺 同 亂 同 刀 同 紋 同 琴 同
花 斗 喜 葉 美 月 耽 三 太 人
坊 亭 亭 葉 美 月 耽 三 太 人

雜川
誌
社柳

糸屋町會（大阪）

九月二十日夜 於博物場内喫茶店

川合舟々報

兼題
相
談

毒仙選

當然の様に相談もつて来る
相談相手に迷ふ若後家
お互ひの慾で相談ましまらず
働らけぬ人さ見てゐる相談所
相談に乗つた筈から恐ろしく

双葉子
蒼梧樓
京 郎
源 坊
萩 鷹

双葉子
蒼梧樓
京郎
源坊
萩鷹

相談に乗つてくれさばこそばゆし
相談があるさ羽織の紐を纏り
妻が出てその相談は打ち消され
相談の思はしからず酔ふて
心みりとする相談は開けあ
相談の背中合せに聞いてある
相談が出来て裸にしてもらひ
こほらぎも同じく話さざら
かす(軸)相談のすむ頃五目飯が炊け

多喜女 同翠 同鮎 同舟 同毒 選
峯 美 々 仙

兼題 戀文 鮎美

選

戀文を秘めて異國の人となり
戀文に胸も躍らずなりけり
戀文を出して仕舞へば腹が
戀文の來ぬ日の女優瘡高し
ラゲレター男だん／＼弱くなり
戀文は貴女まかせのやうに書き
逢へぬ夜を戀文讀んで寢たりけり
戀文へ聴しなむが手が震へ
（轉）戀文を風に吹かせて長く讀み

鮎同翠同源同毒同多喜女
美峯坊仙

兼題 握

多喜女選

摺鉢を握る五圓に、
 指手に握る五圓に、
 摺鉢の音に小鳥のうに馴れて
 分家へも分けて摺鉢仕舞はれる
 摺鉢の向ふで女房すれてゐる
 摺鉢の嵩を姑は聞いてみる
 摺鉢を握るゝに子か押は
 摺鉢の音に小鳥のうに馴れて
 分家へも分けて摺鉢仕舞はれる
 摺鉢の向ふで女房すれてゐる
 摺鉢の嵩を姑は聞いてみる

翠峯 舟女 多喜女 選 源坊 毒仙 舟女 多喜女 新水

に握る五

出來率

兼題 摺

蕨
麋

選

新世帯今日摺鉢の音を立て

同 翠峯

たよに來た旦那摺鉢持たされる

同 同

覗き込むやうに摺鉢摺つてある

同 同

(佳)猶追ふてある摺鉢へ蠅が飛び

同 同

(佳)父が摺つてある摺鉢の音

同 同

(佳)摺鉢をこわく繼子おさへる

同 同

(軸)摺鉢へ指突込んで見る亭主

同 同

兼題 眞劍 眞劍に働いて二圓

同 同

眞劍に話すに兄は欠伸して

同 同

眞劍ですよこいらぬ岡焼き

同 同

笑はれて眞劍になる恐ろしさ

同 同

眞劍にやればと思ふ腕を持ち

同 同

(佳)眞劍で立つと双方さもふるへ

同 同

(佳)眞劍がつい商賣を留守にする

同 同

(佳)眞劍になるさ珈琲冷へて来る

同 同

(軸)ぼろそんな話へ親父向きになり

同 同

兼題 忠僕 忠僕に

同 同

(地)忠僕が夜更けの街を一と走り

同 同

(天)忠僕が一人仕へてある住居

同 同

(軸)忠僕が女房に縁のない男

同 同

(同)伺ひごろさにはなりぬ忠僕

同 同

兼題 闇 赤城

同 同

虫聞きに女主人は闇に立ち

同 同

闇の峠を越へる不義者

同 同

闇の戀追つかけられてあるやうに

同 同

片側の闇を別れて歸るなり

同 同

眼醫者から出て闇にさぼつく

同 同

兼題 音 翠峯

同 同

いゝ音をさして桶屋は儲ふてゐる

同 同

看守ふさわが靴音を聞き違へ

同 同

いゝ音で抜いたラムネがこぼれる

同 同

パンクした側に子供は立つてゐる

同 同

腕組みの耳へ幽かに錢の音

同 同

獨學は水車の音を聞きながら

同 同

辻斬は已が末期をふと思ひ

同 同

兼題 應援 互

同 同

援應旗赤い夕陽に照らされて

同 同

應援の氣が描つてくる面白さ

同 同

應援はたゞぐんばれ云ふばかり

同 同

應援の中に彼女のコンバクト

同 同

叱られる氣で親分の跡をたづね

同 同

應援の方へ見物氣をさらけ

同 同

應援へ北の方から疊つて來

同 同

應援團みかんを口へ入れてやり

同 同

兼題 停電 互

同 同

ろうそくを配り終ればつまつき

同 同

停電の中に置かれた許嫁

同 同

あゝ消へる電燈遂に消へ

同 同

くらがりの中で蠟燭二丁賣れ

同 同

停電へわびしく光るお燈明

同 同

停電に今夜の空の美しさ

同 同

毒仙

翠峯

新水

蒼梧樓

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

毒仙

翠峯

新水

蒼梧樓

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

互

ほんのりさ酔へば簪のあだめき
簪を抜いて朝から氣がふさぎ
簪がゆれて男のものさなり
簪の重さは少く抜けてかかり
小走りの手を簪へあてて見る
かんざしを落ちそうにさす圍ひ者
泣き伏したさこそ簪をしはてる
簪を抜いて女の氣が替り
簪を抜いて仲居のよい姿

ひろし
開路
刀三
孤舟

若白髪江戸辯で来る 前前持ち
堂島にまだ氣があつて白髪染め
暴風の事で白髪が役に立ち

清弘
刀三
同

父の年老眼鏡がはなされず
(軸)借った眼鏡に四十の老を知り

同
ひろし

白粉焼けのした女居て「内湯あり」
死を思ふ日の温泉に秋を知り
白い足見せて二人は温泉に暮し
温泉の宿の天井に蜘蛛のつるんで
温泉の文士原稿料さなり
裏切者さ山の湯に逢ふ
温泉にひさり残つて秋さなる
癒つたでなく温泉の宿を立ち
暇なのでなく温泉に浸たつて
温泉に心よかせば欠伸出る
子に譲る話をのび温にひとり

素人
十字路
琴笑
三笑
開路
舟々
同舟
孤舟
同舟
松耶
同

愛の葉に月賦の水屋ある斗り
月賦から月賦へかきく様に生き
月賦は月賦さきめて飲みあるき
洋服くりの減と月賦のはかざらす
暗算で割れる月賦がまたあつて
長男は月賦づくめのうちに出来
月賦住宅伸びたうごんを喰はさる
月くすし一人息子に先だれ
月掛けの品ただのやう買ひ揃へ
月賦買ひ胸算用へ無理が出来
月賦もう返へすに骨が折れて来る

素人
十字路
琴笑
三笑
開路
舟々
同舟
孤舟
同舟
松耶
同

田舎者笑はれながら勤めて居
里からの土産枝豆さげて来る
田舎へきて今日風があり
失敗してから田舎へ戻つて来
閑静さほめて晩をさびしがり
田舎から来た當座は少し蓄めて
一日が長し田舎で病む息子
畦道を父の危篤に急ぐなり
田舎に居れば不自由な身なり
田舎者そんな履き見まじようか
ラッパは鳴り馬車は揺れか
素うごんが馬鹿に太いも田舎なり
出養生田舎の朝に親しめり
栗おこし田舎へ歸るつゝみもの
田舎もう栗も拾ひにゆく時分
(軸)朝顔の垣根静かに陽があたり

同
ひろし

氣にしてる白髪にきつい陽が當り
朝湯の鏡に見れば男の白髪染
膝貸して見れば男の白髪染
白髪抜くはずみに耳がかゆくなり
植付ける様に白髪を抜いて見せ
白髪を抜くのへ虫が鳴いてある
一ト通り見せて白髪の捨て所
友達の氣安さ白髪抜いてやり

双葉子
ひろし
琴人
五合
悟部
彩秋
十字路
孤舟

兼題 月賦
ひろし
選

味空露
賀名芽
観月
冷笑
同竹
同美
同

兼題 田舎
二柳子氏選

味空露
賀名芽
同

兼題 眼鏡
ひろし
選

水谷鮎美報

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 眼鏡
ひろし
選

水谷鮎美報

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 眼鏡
ひろし
選

水谷鮎美報

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 眼鏡
ひろし
選

水谷鮎美報

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 眼鏡
ひろし
選

水谷鮎美報

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 眼鏡
ひろし
選

水谷鮎美報

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 眼鏡
ひろし
選

水谷鮎美報

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 眼鏡
ひろし
選

水谷鮎美報

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 眼鏡
ひろし
選

水谷鮎美報

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 眼鏡
ひろし
選

水谷鮎美報

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 眼鏡
ひろし
選

水谷鮎美報

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 眼鏡
ひろし
選

水谷鮎美報

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

兼題 猫
かほる氏選

賀名芽
冷笑
同竹
同美
同

(軸)丸うなる猫に手くたを思ひま かのろ

川柳雜誌社
加古川支部
めだか吟社例會(兵庫縣)

九月廿日 水田 黄彩 報

兼題 薄情

薄情を忘れ切れずに獨りある 黄彩
薄情なお茶一杯で歸す氣か 同
薄情を賣物にする高利貸 洛陽
薄情な態度で心引いて見る 同
薄情な言葉に彼はよひがさめ 同

兼題 口答へ

口答へする程仲がくだけて來 洛陽
口答へして子供は逃げて行き 同
口答へして父親を甘う見る 泰山
叱られてあやまつてゐる口答へ 同
口答へ洗濯板へ手が荒い 黄彩
口答へ姉の涙にふさ黙り 同
女房に理屈があつて負けてゐず 同

川柳雜誌社
北濱支部小集句會(大阪)

九月二十九日 谷村 稔 報

兼題 感心 互

俺の子にしては勉強の好きな奴 伊佐美
感心な中にも矢張り子供也 一舟
甲の上父仰山に褒めてみせ 風鈴
感心をして手習を始める氣 幸泉
感心な話に丁稚フイミ立ち 稔
行倒れ貯金の通い持つてゐる 同
校長が感心してゐるむしの見 同
お自慢へせうこなしの感心し 素人

面白い程感心をされてゐる 文蝶
感心をされて背中の汗を知り 同

兼題 さばる 革 耶 選

昇給の不平は辭める氣でさばり 風鈴
さばりたい氣分を朝の床に持ち 稔
見習に教へてさばる幾日なり 幸泉
物足らぬ心でさばる外交員 文蝶
時計まで主人を真似てさばつてゐ 一舟
要領よくさばれば課長わかつてる 同
(軸)さばること覺へて今日も恙と 同

兼題 月 素 人 選

老朽の任地左遷の月を見る 桂枝
大阪をはなれて月一酔ふてゐる 幸泉
病室へ月平等に訪づれる 風鈴
月の出るまで夜釣に誘われる 佳風
ヤツチヨロを逃さず下戸は月を褒め 伊佐美
月白ふ訝へて水車の軋る音 一舟
酔眼朦朧として月へ座し 稔
見仰れば月寝ころべば虫の聲 同
盃の順が廻つて月を褒め 文蝶
月を見る女工の頬に涙あり 革耶

川柳雜誌社
平塚支部十月句會(神奈川縣)

六日夜支部ニテ 駒 人 報

兼題 栗 駒 人 選

雨の朝栗ひろつてゐる子のけんか 柳思
新聞で見る故郷の栗の味 美知坊
一つかみもちつた栗で秋さ知り 同
御亭主を呼んで初栗値切らせる 娛鹿

(人)栗しと墓場に淋しく拾つてゐる 城月
(地)里の栗届き新妻となつて居り 娛鹿
(天)栗鈴を音して落つる水たまり 柳思

兼題 横 名譽選 城月 選

横町にカフェ出来たを見てかへり 美知坊
横町の娘笑つて賣る煙草 柳思
警察の横で支那そば一ツ賣れ 駒人
(佳)洋館の横手ハンキの風が来る 同
(佳)見舞客横の包をやびて開け 美知坊
(軸)横丁をまき豆腐屋リンを振り 城月

兼題 泣 互 選

多愛なく泣く子へ夕焼の陽があたり 美知坊
たんざ泣けそれで苦痛がされるな 同
兼題 車夫 互 選
さらつてく自動車車夫たどなる 美知坊
暮しする車夫終日走るなり 娛鹿
雪になる支度で俚風朝のめし 駒人
抱車夫今日故郷の土をふみ 同
乗さ來た客汗ふきく車夫送り 城月

兼題 敗戦 互 選

返盃もなく敗軍の將は呑み 駒人
敗戦のただ黙々し驛を降り 美知坊
敗戦の將へ變らぬ月が照り 同

川柳雜誌社
螢ヶ池支部句會(大阪)

松並 光哉 報

殘暑漸く去つた十月七日午後一時より萬よし、車郎雨氏を迎へ句會を開く。席ト萬よし氏の句に對して懇切なる批評、並に車郎氏のユーモア文學、ついでに御話あり、益する所

萬
よ
し

水ばなな太鼓へ落す寒参り
幽霊を出すのに太鼓はよし
旅先で祭の太鼓なつかし
朝霧に櫓太鼓の勇ましく
古太鼓埃りだらけに宮の藏
太鼓判捺すきんで賭さなり
母親にねだる太鼓は強く鳴り
八木箆に亂れ打ちて引き立たせ
ひさしきりたいてからを東西屋
大太鼓觸つて見ても鳴る氣配
太鼓打つ夜番の指も凍つて来
太鼓判捺されて見ても頼りなし
森見へる頃から太鼓聞へて来
風船屋枕太鼓に追はれて来
太鼓の音又一錢をねだられる
（軸）夜も熱が出るかも知る果太鼓

席題 眼 革 郎
流し眼にみつめられ其の夜眠らず
知らん振り眼さ眼が逢つて横をも
自信ある眼が壁に突き當り
話さぬ氣もうその方へ眼をやらす
思案するこにいつぱい眼をたぎ
臨終に一度はつきり眼を知らせ
（人）呑むなさは女房眼で知らせ
（地）人間の眼の届くこ星の数
（天）眼に見えまんまの佛信じ切り
（軸）彼女眼を信じ眼を信じ

席題 波 光 哉
井上陽二 萬よし
波紋 紫峰 湖舟 光哉 同 革郎 一流 同 萬よし
陽二 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし
井上陽二 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし 萬よし

兼題
松茸

互

波紫革井葭同萬同普同選
紋海郎上舟よし門

松茸一力餘つて根を残し
松茸の香ひをつから探し出し
松茸が飲めくく云ふ如し
先づ松茸を見付けた聲になり
松茸も出ます文化住宅地
松茸の値段を聞いただけの事
松茸がもう出てゐるを見て通り
松茸が土を破つたその姿
松茸めし母が自慢の味を見せ
松茸狩只飲んでゐる組もあり
松茸飯だ晩飯を食へて行け

川柳雜誌社
鳥取支部 川端柳社 川柳忌

末の子は佛の父をくどう聞き
書置きの佛を命日に供へて居
破門してから師匠の疲れ様
權門に詣り得ない此の憫み
秋が來て佛に近ひ吾を知り
裏門でないさくづれぬ人になり

鐵耕湖佳放 鳥取 普同邦同革同 萬一 葭光紫
洲民山水我 門 耶 郎 流 舟 載 海

佛壇の前に洋服がしこまり
金借りて佛心も遂に見ず
御佛に仕へる身にも春が來て
御務所に鎖して晝を死の如し
御通夜から戻て母に風邪を引き
同

一風
伯山
水
青
長

川柳雜誌社
加古川支部
めだか吟社例會
(兵庫縣)

席題
金庫

十月四日

1

[illegible]

川柳糸屋町小集 (大阪)

雜誌社 八月七日夜於寶業會館川合舟々報

席題 星 五 選

先頭の牛に聲あり星明り
明星を見つけて子供唄になり
千し場から星を見て来て旅仕度
星がかゞやくボートに二人乗り
仰山な星を見けるキヤンビンガ
星見へすSISは續けられ
兄さんの背で見てゐた簪星
星明り隣村への橋を越し
啞ふつ星の流れを見付けたり

名賀壽會例會 (尼崎)

九月九日於虛白居 五 選

席題 軍艦 五 選

順敷の事で各國いがみ合ひ
軍艦をさり巻く舟の小さいこと
日曜の軍艦シャツも干してあり
軍艦がたらしの舟に浮いて居る
超弩級吃水深く淀泊し
軍艦に行くにランチで二十分
軍艦のこゝが露艦の砲のあき
軍艦のこれが浮くことは嘘の様
艦上の士官嵐の中に立ち
艦長の室に擠げた世界地圖
席題 算盤 五 選

吉 期 玄 洋 鳴 玉 白 月 眠 聲 同 美 同 選 悦 路 喜 々 居 入 路 選

洋報

算盤を中に夫婦の思案顔
まだまける氣が算盤を膝に置き
算盤の兩端いつも遊んで居
算盤をはちいた後が酒になり
入れて見て初めて知つたこの負債
算盤へ正直すぎてまゝならず
算盤でやる割算は出来ませぬ
算盤の最中クシヤミ問ひ返し
魚屋の算盤うるこくつつけて
思案にあまり算盤もつて見る
算盤へ又爾の値がちさあがり
不景氣へ算盤すこしかたくなり
四拾五入幹事どうやら浮かぬ顔
算盤をはじめて獨り悦に入り
給仕また算盤丈けに呼ばれて居
こんな結果になります算盤
そろばんを置けば意見がまた變り
御破算の丁稚へうごん持つて来る
ボリナスはもう算盤にはいつても
席題 繪葉書 五 選

玄 洋 鳴 玉 白 月 眠 聲 同 美 同 選 悦 路 喜 々 居 入 路 選

第十五回 鼎座小集 (神戸)

小 鐵 千 鳥 報

旗竿をおろすに父を煩はし
編蝠を追ふて竿に子は疲れ
物干の竿へ大きな月が浮き
棹竹へ寒残して照つてゐる
乳母車
乳母車小さな石へつまづき
繩飛びへ来て乳母車はつさかれ
聞き分けもなく兄の方乗れたがり
這ひ上る兄へ乳母車走るなり
乳母車庭を狭ふに雨降り日
孝行はしても日立たぬいゝ生活
遊び度い頃を親と暮ぐ
同 千 鳥 同 選

芳 香 子 同 選 芳 香 子 同 選 芳 香 子 同 選

一重にも綿入にもするこの裕
夏やせの肩に残つて初裕
裕着て女房少し老けを見せ
裕まだ去年の儘の折目で居
裕うほごいたまゝで夏を越し
母病むで春の裕のまゝきせる
今日着せた裕にいやな水溜り
よう見ゆる裕の柄も二十頃
病上り裕姿の淋しうて
今日からの裕にしつけ糸をさり
姉の襟袖に似合ふ名古屋帯
信心の母は裕の裾を折り
(軸)秋の色裕のあさへ浴衣入れ
初裕菊人形の連れになり
同 眠 聲 同 貼 同 虚 同 吉 同 鳴 同 玄 同 選

芳 香 子 同 選 芳 香 子 同 選 芳 香 子 同 選

出勤の門で子供を笑はせる
出勤の父のオーバはやけて居る

席題 乗替

互 選 白

乗替にさう／＼彼をまいてやり
乗替に發車信號入釜敷く

席題 乗替

互 選 白

乗替に云ふ聲丈けがよくわたり
乗替へて辨當箱を忘れて來

席題 乗替

互 選 白

交又點乗替丈けの人が込み
子を連れて乗替なしを待つて居る

席題 乗替

互 選 白

乗替を氣にして母は送つて出
大廻りあの乗替で用があり

席題 乗替

互 選 白

乗替に車掌は釣に困つて居
乗替に車掌は釣に困つて居

席題 乗替

互 選 白

迷子の言葉は巡査もてあまし
迷子は巡査の劔をいぢつて居

席題 乗替

互 選 白

迷子は指を擧げて齡を云ひ
迷子の中に人垣つくつて居

席題 乗替

互 選 白

迷子を見せ歩いて歩くも甲子園
歸らない子に御近所も騒ぎ

席題 乗替

互 選 白

迷子は問へば問ふ程泣きじやくり
迷子へ親へいゝさ低頭し

席題 乗替

互 選 白

彈丸の中に信心の眼をつぶり
すゝめられるまゝ信心で氣をや

席題 乗替

互 選 白

信心の母のやつれが目になつて
信心の此頃早く起きる癖

席題 乗替

互 選 白

信心の力のように勤けり
信心は砂を拂つて立ち上り

席題 乗替

互 選 白

溜息をついて善意に解釋し
溜息をついて善意に解釋し

観 選 月

溜息のそばで女房子をあやし
溜息をうしろに聞いて醫者は去に

溜息へそれでお前は男かい
溜息へそれでお前は男かい

氣が弱いなど溜息はげまされ
思はずさ出た溜息を疑はれ

年頃の溜息母は見逃がさず
出戻りの吐息に母もつけこまれ

溜息の度に軍笛は空いて居る
溜息の度に軍笛は空いて居る

溜息も乗せて急行走つて居る
溜息の譯をたゞせばわつさ泣き

溜息の思ひ餘つて死をえらみ
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

夕食もさらす溜息だまつて居
夕食もさらす溜息だまつて居

川柳 北濱支部十月例会(大阪)
雑誌社

十月十三日於武庫商店 谷村稔報

席題 秋の夜

互

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

秋の夜を短かう過ぐす手内職
さつくりさ意見なされて夜は長し

國元の親はモガさは知らぬなり
カクテルにモダンガールの紅の色
純真な氣持を抱いてモガさなり
露路が出るモダンガールへ途なき
モダンフト島田になつて見たくも
モダンガールイミテーション
大阪を離れてモガの淋しい日
モガある日母にそむいて置手紙
モガ今日も脚氣の足を撫でる
大道へ出てからモガさいふ歩調
喋るだけ喋るモダンガール降り
(軸)モガ一人家内親族もてあまし

兼題 白 素 人

白墨の粉をあびて又今日も暮れ
兎に角も僕に白紙で委さぬか

共稼ぎさにかく白い夕御飯
兎に角も白紙のまゝで逢ひませう

まづ白く暮れてゆくこのごろの戀
まひるまの風が身に浸む

白布今染工場へ投げ込まれ
みたされぬ心敷布を取り替へる

壁が持つ白さへ暗のさからわす
嬉しさを頭へみせる赤てがら

赤心をつむ軍服はころみびて
夕陽は赤し今日も顔みね

ステッキの太さ赤化さも照らぬ
鬼灯の二つ三つ色づきし戀

せめてもの慰め後家の赤禪
口紅へフト憎しみを抱く朝

口紅へフト憎しみを抱く朝
口紅へフト憎しみを抱く朝

口紅へフト憎しみを抱く朝
口紅へフト憎しみを抱く朝

口紅へフト憎しみを抱く朝
口紅へフト憎しみを抱く朝

口紅へフト憎しみを抱く朝
口紅へフト憎しみを抱く朝

口紅へフト憎しみを抱く朝
口紅へフト憎しみを抱く朝

口紅へフト憎しみを抱く朝
口紅へフト憎しみを抱く朝

口紅へフト憎しみを抱く朝
口紅へフト憎しみを抱く朝

口紅へフト憎しみを抱く朝
口紅へフト憎しみを抱く朝

口紅へフト憎しみを抱く朝
口紅へフト憎しみを抱く朝

南海 第拾回川柳の會 (大阪)

至誠 十月八日午後六時於天下茶屋集會所

雜 吟 路 郎

子の爲めに淋しく暮すタイピスト
苦しんで生きて行ければ結構や
先生の御病氣御見舞
すこやかであるも淋しい秋だのに

鼠 路 郎

菓子^の無いことを鼠にしてしまひ
長持なれば鼠の出入り
支那靴底に鼠の糞ばかり
婦しくも鼠へ貸金借り人あり
衛中へ落ちるに鼠餅を引き
こそく鼠の様に貯めてある
輪を廻す事も覺へて白鼠
静けさに鼠うつかり覗いて見
萬全を期したが鼠さり損れ
沸き返る騒に鼠逃げ遅れ
やかましく呼ばれて見れば樹落
まだ死なぬ片眼の鼠今日も来る
怒つて父へ鼠の糞が落ち

支那靴 路 郎

わたしと支那靴丈け子供いひ
支那靴はるにはられぬ儘残り
支那靴出せば湯気が鼻をつき
支那靴下女の金庫もつさめてあ
ある丈の衣裳詰めてる支那靴
獨身者机を兼ねた支那靴
仕替する頃支那靴空になり

選

五 輪

吞 陽

樂 亭

選

一 杉

靜 石

貴 山

萬 年 青

樂 亭

同

一 杉

黑 天 子

吞 陽

樂 亭

飄 霞 樓

吞 陽

選

河 石

靜 内

飄 霞 樓

萬 年 青

河 内

吞 風

五 輪

蝶番附け直してゐる支那靴
縁あつて貰はれて来た支那靴
支那靴一つで私嫁たのです
支那靴あけて天勝めいて立ち

店出の當時一つ支那靴
米櫃の代り一つ支那靴
(人)支那靴新聞當てつかつたり
(地)よそ行きの下駄も入る支那靴
(天)よく聞けば支那靴鳴る時計

神經衰弱 五

神經衰弱後残つて物を書き
みす知る事に馴れてる神經症
吾が惱み知らず茶碗は圓くあり
神經が衰へるまで戦かはふ
神經衰弱船に乗りたく思ふなり
胡寛かしてくれても神經衰弱
終點は心安めた事になり

川柳雜誌社 川柳たかせ會 (島根縣)
支那 支那

十月十二日夜 於縁之助居

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

兼題 焚火 伊藤縁之助報

目をこすり焚火に吸ひつける
まんなな月が焚火を見つめてる
忠僕の焚火平和な姿なり
山賊の焚火にこるな燭が出来
人監督の聲に焚火を置いて散り
(地)焚火から呼べばこまます
(天)炊き出しが届く焚火輪を崩し
(軸)棟梁の顔が焚火へ浮いて来る

席題 空腹 互
空腹はおろか致命の一仕事
炊出しに兩方手を出してある
空腹の二人に燭が熱つすぎる
逃けのびたさで腹落腹が減り

席題 電報 幸永、夢二共選
電報を見た目淋しい星を見る
十五字に詰める電文目をつむり
電報を打つて始末を考へる
「スグコイ」の報に困つた荒れ模様

席題 嬉 瀧郎、鐵郎共選
嬉しさの飛んだ粗相を仕でかせ
髪癖もついて嬉しいう日が近し
知らぬ顔するの嬉しさ隠さる
縮緬の裾に嬉しさ隠さる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる

席題 全快 縁之助選
全快も近し小島に餌をや
(人)病み上り野次つてたこへ
(地)全快の祝又臥る程に呑み
(天)全快に以前の固氣増してゐる



編輯後記

▼私は今、何事も忘れて、たゞぼんやりと暮してゐなければならぬのである。私自身が一つの工場だと思つれば、この工場の煙突からは、もう久しく煙りのあがらないのである。煙りの出ない煙突は他所目にさへ淋しいものだ。まして、たゞぼんやりと突ツ立つてゐる煙突自身の淋しさすらない。

▼しかし雑誌は滞りなく出てゆく。眞一文字に、ひたおしにこれ一つに、みんなの力だ。友情の總和だ。その力強さに僕は泣いてゐる。(路郎生)

▼近藤館坊、大谷五花村兩氏は關西旅行の途、去る十七日本社を訪問、萬よし、ひろし二君主幹とつれだち佳吉へ行かれ、寶市の神事を見物された。

▼稻が黄色に實つてゐる、その色は單に黄色いといふだけでは片付けられない。もつと深いものがある。日本語の色に對する言葉の貧弱さを痛切に感じる一本一株の稻にも個性がある。それ

れを完全に言ひ表はすことが出来ない、況んや人間をや、今更の如く川柳の難しさを思ふ。編輯局裡忙中柳あり駄洒落飛ぶ、路郎主幹病を押して出席さる、主幹の軀を思ふの念は切であるが、編輯の時に來て貰へないさ淋しい、それは主幹が我々にこつて光りであるからだと思ふ。

▼曠古の御大典を奉祝するため記念號を出さうかとの議もあつたが、主幹が病氣なので若し貧弱なものが出來てはさうふの内容、本號は普通號にした、然し内容には少し鼻を高くしてもよいと思ふ。ほご賈い原稿なり、句なりを掲載することが出來たことは編輯者としての喜びである。

▼花菱、三太郎、柳雨、紋太諸先生の原稿を掲載することが出來たことは本誌の光榮であり歡喜である。茲に諸先生に御禮を申上ます。(革郎記)

▼本社の京阪神地方の各支部では聯合して御大典を永遠に紀念するため支部聯合句會を花々しく開催されましますから賑々しく御參會をお願います。當日紀念品の寄贈など澤山あり佳作に呈賞も致しますから本社では十一月例會を廢して後援することにいたしました。

▼友淵貴山氏は今回堺支部幹事として活躍される事になつた。

▼詫間三猿堂氏は別府支部の幹

事として木村晃卓氏と協力されて本社のため御盡力下されることになりました。

▼客員の蛭子省二先生は冬期に向つたので喘息に苦しんで居られますが、あきらみながら何か變つたことをあれば病人を喜ばす便りを書いてあげて下さい。

▼社友中野柳陽氏(在長春)から紅葉なんて言葉は聞くにつけ内地が戀しくなつて仕方がありませんとの便り。

▼社友岩崎柳路氏は九月十八日伊豆下田へ旅行されました。

▼社友岩本素人氏と松盛琴人氏とが母堂の一週忌に十月三日近江へ歸郷された。

▼安西杏三氏は永らく蟹ヶ池支部幹事とし御盡力されてゐましたが、今回松並光哉氏と交替されました。

▼滿洲川柳社で發行されてゐた「黃海」の終刊號を出されました。

▼京都川柳社で奉祝川柳大會を十二月二日正午より京都東山圓山公園菊溪俱樂部で開催されまします。本社も贊助をしてゐます讀者諸氏の御參會を希望致します。

▼住夢遊氏は西國三十二ヶ所の巡拜を思ひ立ち成相寺へ來て居るこの御便りがありました。

▼白河柳因會の主催で御大典記念川柳大會を福島縣白河町白河ホテルで十一月十八日午前十時

移轉

より開催
▼太田鶴陽氏と私は濱寺海岸で十月四日、釣魚をこゝろみながら大漁々々(二柳千記)

伊藤彦造氏は大阪府豊能郡南豐島村字積穂一四七五へ▼石川双葉子氏は大阪府守口町寺内へ▼安西杏三氏は大阪府北區岩井町二ノ上杉方へ▼早川睦造氏は鳥取市宇新茶屋へ▼古夢村氏(影像社)廣島縣海田市町へ▼大山露斗氏は大阪市東區猪飼野町九四〇三木方へ▼山本雨迷氏は川柳たまむし吟社、大阪市東淀川區中津濱通一ノ〇三三へ▼高須清二氏は東京市外蒲田町女塚一三〇へ各轉居

正誤

前號三三頁鬼逸樓氏の句「現世で見える墓の高低や」は「高や低」の誤。
三四頁一杉氏の句「戦友の墓は南瓜花ざかり」は「南瓜の花ざかり」の誤。
前號各地柳壇「鼎座小集」の「小つばけな石が着綿に圍れて」郊村「小つばけな石が眞綿に圍れて」
前號十八頁「金持の親類さか眞直ぐ歸り」杏三は「金持親類さか、直ぐ歸り」に各訂正

投稿規定

- ▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」を封筒に未記すること。
- ▼締切は嚴守されたい。
- ▼各地會報は清記のこと。
- ▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。
- ▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募 集

第六卷第一號課題

十一月五日締切
(各題十句以内)

- ▼年賀狀
蛭子省二選
橋本二柳子選
- ▼港
岩崎柳路共選
- ▼受附
安井ひろし

第五卷第十二號課題

十二月五日締切
(各題十句以内)

- ▼足音
前川雀郎選
- ▼賣家
庄萬よし選
- ▼子守
高橋かほろ選
太田朝陽共選

每 號 募 集

- ▼近作柳柳(廿句迄) 麻生路郎選
- ▼古句質疑(三句迄) 蛭子省二撰當
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價 定

普通通號 一部 金拾錢
新春特輯號 一部 金拾錢
八月特輯號 一部 金拾錢
半箇年前金(特輯號共) 壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯號共) 參圓八拾錢

料 告 廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送金によつて御承知願ひます▼送金封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも預ける様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號より御指が願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和三年 十月廿五日印刷

昭和三年 十一月一日發行

第五卷 第十一號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪市西成區千本通五丁目七番地 麻生 幸二 郎

發行所 大阪市西成區千本通五丁目七番地 川柳雜誌社 振替大阪三一五二四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

店書捌賣

(大阪) 大寶捌 サクラヤ書房。(明文堂 其他市内各書店)
(東京) 仲見世 玉森堂(神戶) 米田、後藤(函館) 石塚
(石川縣小松) マコト屋(京都) 三宅

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから／＼新刊が出るゝ新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にさつては、誠にありがたしい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちに幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

(路耶生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

洋裝美本 全一冊

定價 五十錢 郵税 二錢

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリ合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて来る



灘 津 攝

嘉納合名社會釀

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入

川柳 漫畫 累卵の遊び

定價 壹圓 (送料拾錢)

實に氣持のいい本ださ云はれてゐますのでよろこんでゐます。皮肉で面白いのでよく贈物になります。書店で賣切れてゐましたら直接御注文下さい。御送金はなるべく振替を御利用願ひます。(霞乃)

川柳とは何ぞや——の數萬言を聴くよりも本書を繙け！實に愉快に而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

内容概目

川柳 漫畫 累卵の遊び

日月は輝く
大衆と共に

麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博したる川柳漫畫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を標題により収録したるもの——。

「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの——。
「講談俱樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興味を湧かしめたるもの——。

不朽洞製

句帖

(實發く近)

▲ふみ湧出づる句境を過さぬため絶えず此の句帖を懐ろにしてゐて下さい。

▲自分の句、先輩の句、又は古人の句を書抜くためにも好適の句帖です。

▲定價金四拾五錢 送料金六錢

大正十三年三月三日第三種郵便物認可(毎月一冊二日發行)
昭和三年十月二十九日印刷本
昭和三年十一月一日發行

川柳雜誌

(第五十八號)

定價 三拾錢

大阪城西區千本通五番五
振替五八五二五

發行所 不朽洞